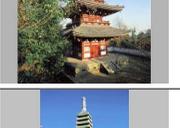


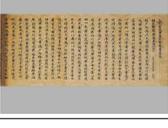
国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	国宝(建造物)	浄土寺多宝塔	じょうとじたほうとう	1基	尾道市東久保町	明34.3.27 昭28.3.31(国宝指定)	三間多宝塔, 本瓦葺		鎌倉時代末期, 嘉暦3年(1328)建立。大日如来及び脇侍(わきじ)(尾道市重要文化財)を安置し、内部には彩色が施され、壁面には真言宗の名僧を描いた真言八祖像がある。 多宝塔としては、規模が大きい上に全体のつらやうがよく、高野山金剛三昧院や石山寺の多宝塔と並ぶすぐれた塔である。牡丹・唐草に感の透かし彫りした蓋版(かえるまた)など、華麗な装飾に富み、その整った姿容および手法によって、鎌倉時代末期の代表的な建築とされる。昭和11年の解体修理で、屋根の上の相輪(そうりん)の中から経巻など多くの納品物が発見された。		関連施設: 浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
国	国宝(建造物)	浄土寺本堂 附厨子1基 棟札2枚 浄土寺境内図2枚	じょうとじほんどう	1棟	尾道市東久保町	大2.4.14 昭28.3.31(国宝指定)	桁行五間, 梁間五間, 一重, 入母屋造, 向背一間, 本瓦葺 棟札 2枚(嘉暦二年四月十一日, 正徳二 年四月十一日各1枚)		浄土寺は、鎌倉時代末期(14世紀初め)に築かれたが、尾道の人々によって、数年後には再建された。この本堂も尾道の人沙弥(しゃみ)道運(どうりん), 比丘尼(びくに)道性(どうしやう)が発願して、鎌倉時代の嘉暦2年(1327)に大工藤原友国, 同国貞により建築されたものである。前面二間造りを外陣とし、うしろを内陣とする密教式平面である。和様を基調としているが、棧唐戸(さんからど), 花刹木(はなびしき), 二斗などを用いたいわゆる折衷様式である。		関連施設: 浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
国	国宝(建造物)	向上寺三重塔	こうじょうじさんじやうのとう	1基	尾道市瀬戸田町	大2.4.14 昭33.2.8(国宝指定)	三間三重塔婆, 本瓦葺, 高さ19m		室町時代・永享4年(1432)建立の塔。信元・信昌を権那として建立された。全体に和様を基調とするが各層の扉木を扉裏木(あうぎたなまき)とし、花頭窓(かとうまど)を入れるなど、細部にかかり渡部に禅宗様の手法が取り入れられている。肘木(ひじき)やすみ木持ち送り彫刻なども巧みに作られ、扉裏木下縁採肘木(おたるきさえようじき)の先端は全部彫刻を施し、かつ彩色を施した駒燗(けくらん)豪華なものである。 向上寺は瀬戸田港北側, 瀬戸田水道を一望できる小高い丘の上にある。室町時代(1333~1572)に始まる禅宗寺院で、小早川氏一族である生口氏と深い関係を持っていた。		
国	国宝(絵画)	絹本着色普賢延命像 面納裏に「延命像仁平三年四月廿一日供養」の 墨書がある	けんぼんちやくしやくぶげんえんみやうぞう	1幅	尾道市西土堂町	昭42.6.15 昭43.4.25(名称変更) 昭50.6.12(国宝指定)	二十臂像で四白象にのり各象首には四天王を頂く形式	縦146cm, 横85cm	平安時代後期の仁平3年(1153)の作。本品は二十臂(ひ)延命像としては最古の作品であり、描写の上でも像の尊厳や二十臂をかたどるたゆみない束縛、強い鎌(くま)どり、大ぶりの彩色文様に加えて、象頂の四天王に見られる力強い動きの表現など、鎌倉時代(1192~1332)に見られる画面に近い特色を持つ。時代様式の家遣を知るうえで貴重であり、他の作品の年代決定にあたって基準となる作品である。 ※普賢延命…特に延命を功徳とする普賢菩薩像。腕が2本のもの。20本の腕を持つ二十臂延命像がある。		
国	重要文化財(建造物)	浄土寺阿弥陀堂	じょうとじあみだとう	1棟	尾道市東久保町	大2.4.14	桁行五間, 梁間四間, 一重, 寄棟造, 本瓦葺		浄土寺本堂(国宝)の東端に立つこの建物は、南北朝時代、康永4年(貞和元, 1345)再建と伝えられる。本堂, 多宝塔(国宝)が再建された後に建てられたものと思われる。優れた和様建築と評価されている。本堂は阿弥陀如来坐像(釈尊文)である。 浄土寺は福徳寺の古刹(こさつ)で、尾道水道東口付近に位置する。鎌倉時代(1192~1332)以後、西大寺流律宗寺院として特に信仰を集めた。		関連施設: 浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
国	重要文化財(建造物)	西国寺金堂 附 厨子 1基	さいこくじこんどう	1棟	尾道市西久保町	大2.4.14	桁行五間, 梁間五間, 一重, 入母屋造, 向背一間, 本瓦葺		西国寺は行基菩薩の開基と伝えられる真言宗の古刹(こさつ)である。 金堂は、室憲3年(1386)建立で、和様を基調とした建物である。厨柱上二手先で蛇腹支輪及び小天井付に、向拝(こうはい)は三斗組である。それに虹梁(こうりやう)が掛けられ中供(なかぞなえ)に蓋版(かえるまた)があり、虹梁の柱外には拳鼻(こぶしば)が、また主屋の方へは手挟(たばさみ)が出て威厳が示されている。入母造(しりもやづり)の妻飾(つまざり)は二重虹梁大瓶束(にじゅうこうりやうたいいづか)で、屋根に重層感があり、規模社大で手法雄健な堂々とした感じを与える。内部の厨子(ずし), 須弥壇(じゆみだん)も秀麗である。本道楽師如来坐像(重文)が本尊である。		
国	重要文化財(建造物)	西国寺三重塔	さいこくじさんじやうのとう	1基	尾道市西久保町	大2.4.14	三間三重塔婆, 本瓦葺		この三重塔は、永享元年(1429)足利義隆によって建立された。室町時代(1333~1572)によく行われた復古建築の範和様で、和様と禅宗様の混交の風に見える。奈良時代(710~793)への復興をのぞいたものである。どっしりとした美しい塔で、回縁がなく、石製基礎の上に立つ珍しい遺例である。		
国	重要文化財(建造物)	光明坊十三重塔	こうみょうぼうじゅうしゅうじやうのとう	1基	尾道市瀬戸田町御寺	昭2.4.25	石造, 花こう岩製		この塔は、鎌倉時代、永仁2年(1294)建立であり、基壇に銘がある。西大寺流律宗の僧侶である忍性(にんしやう)が建てたと伝えられ、基壇には作者の心阿(こゝろあ)のみ見える。軒は厚く、力強い反りを示し、初層四面の仏の種子(しゅじ)は薬研(やげん)彫り、雄健な鎌倉時代(1192~1332)の代表的な作品である。 光明坊は、生口島南岸のほぼ中央にある、真言宗の古刹(こさつ)である。		
国	重要文化財(建造物)	天寧寺塔婆 附 銘札 1枚	てんねいじとうば	1基	尾道市東土堂町	昭24.2.18	三間三重塔婆(元五重), 本瓦葺		天寧寺は貞治6年(1367)に足利義隆が建て、普明国師を開山とした曹洞宗の大本寺である。のち本堂などは雷火で焼失し、この塔札が残った。 塔婆は寛慶2年(1388)の造りで、元禄5年(1692)の上の二重を撤去し三重塔婆に改修された。現存する部分は相輪まで当初のものをよく伝えており、和様を基調に禅宗様が濃厚にとり入れられ、規模雄大で手法もまたすぐれている。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財(建造物)	浄土寺納経塔	じょうどじのうきやうとう	1基	尾道市東久保町	昭28.8.29	石造、宝塔基壇付	高さ2.7m	弘安元年(1278)10月、尾道の富商・光阿弥陀仏のために、子息の光阿吉近(こうあしちか)が建てた。供養塔。光阿弥陀仏は、浄土寺が定証(じょうじょう)によって再興される以前に、現在の浄土寺阿弥陀堂などの修造に尽力した人物である。 塔身に胎藏界四仏の種子をきざみ、法華経・浄土三部経・梵網経(ぼんもつきやう)などを奉納したものである。基壇に格狭間(こうざま)をつけ、塔身のみに高欄を設けるなど整備した形を示すが、笠の上に露盤をおき挿花・宝珠にしてあることは古調で、大まき基壇とあいまって重厚豪快な感じがする。鎌倉時代(1192～1332)の石造宝塔の中では年代が古く、形態もよき整った復元品である。		関連施設:浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
国	重要文化財(建造物)	浄土寺宝篋印塔	じょうどじほうきやういんとう	1基	尾道市東久保町	昭28.8.29	石造	高さ3.2m	沙弥行円など四名の逆修(ぎやくしゆ)や光孝らの追善のため、南北朝時代の貞和4年(1348)10月1日に建立された。 みことな格狭間(こうざま)つきの基壇の上を美しい反花(かえりばな)とし、金剛界四仏の種子をきざんだ塔身を安置し、突起には八方天を種子で現している。格狭間には造立の趣旨が刻まれている。基壇と塔身の間に受台を入れていることは、伊予や備後南部の宝篋印塔に見られる地方的特色である。		関連施設:浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
国	重要文化財(建造物)	浄土寺山門 附 檼札 1枚	じょうどじざんもん	1棟	尾道市東久保町	昭28.8.11(県指定) 昭28.11.14 平6.7.12(露滴庵(附中門)分割)	四脚門、切妻造、本瓦葺、両袖潜付		浄土寺の表門で、南北朝時代(1333～1392)に再建されたすぐれた建築である。本堂と同じ工匠の手になったのか、本堂と同様の軒の規矩と同じ規矩をもつことは、あまり時代の差がないことを示すと思われる。側面の妻の部分の板葺股(かえるまた)に足利氏の家紋である「二引間」が表されている。		関連施設:浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
国	重要文化財(建造物)	浄土寺宝篋印塔	じょうどじほうきやういんとう	1基	尾道市東久保町	昭36.3.23	石造	高さ1.9m	浄土寺境内の南側にあり、「足利尊氏の墓」と称されている。 非常に洗練された姿の塔で、各部分の形成つりあいよくとれた引き締まった堅実な姿である。最下層の反花(かえりばな)にある複合の蓮弁及び基礎側面の格狭間(こうざま)は大きくここである。塔身には金剛界四仏を種子(しゆじ)で配し、笠の隅飾はやや外にわたむき、二弧の内側に八方天の種子をあらわしている。 相輪を完備した。南北朝時代(1333～1392)における中国地方の宝篋印塔の代表作である。		関連施設:浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
国	重要文化財(建造物)	西郷寺本堂	さいごうじほんどう	1棟	尾道市東久保町	昭36.6.7	桁行七間、梁間八間、寄棟造、本瓦葺		南北朝時代の文和2年(1353)に二代目住持の託阿(たくあ)が発願して造られた建造物である。角柱上に舟肘木を置くだけの簡素な形式であるが、方三間の内陣の周囲を外陣がめぐる形式の平面は浄土教に特徴的で、時宗本堂墓石の遺構として貴重である。 西郷寺は時宗に属し、正慶年間(1332～1334)に遊行六代の一願によって創始されたとされる。当時は「西江寺」と称し、それを示す石柱と寺号扁額を境内及び本堂内に伝えている。 ※時宗…鎌倉時代(1192～1332)、一遍上人(1239～1289)が開いた浄土教の一派。鎌倉仏で知られる。		
国	重要文化財(建造物)	西郷寺山門	さいごうじざんもん	1棟	尾道市東久保町	昭36.6.7	檼門、本瓦葺		室町時代の貞治年間(1362～68)の建築で、板葺股(かえるまた)や破風などに室町時代の様式がみられる。 西郷寺は時宗に属し、正慶年間(1332～1334)に遊行六代の一願によって創始されたとされる。当時は「西江寺」と称し、それを示す石柱と寺号扁額を境内及び本堂内に伝えている。 ※時宗…鎌倉時代(1192～1332)、一遍上人(1239～1289)が開いた浄土教の一派。鎌倉仏で知られる。		
国	重要文化財(建造物)	吉原家住宅 主屋(附便所1棟) 1棟 納屋(附棧札1枚) 1棟 附鎮守社 1棟 家相図 5棟	よしはらけじゅうたく	2棟	尾道市向島町江奥	昭46.4.30(県指定) 平3.5.31	主屋ノ桁行20.1m、梁間9.1m、寄棟造、茅葺、西面下屋附属、本瓦葺 納屋ノ桁行9.9m、梁間4.0m、切妻造、本瓦葺 宝庫ノ土蔵造、桁行6.0m、梁間3.9m、二階建、切妻造、本瓦葺 鎮守社ノ一間社流見世棚造、鉄板葺		向島の豪農であった吉原家の住宅で、同家に伝わる祈禱札などから江戸時代、寛永12年(1635)の建築と思われる。規模の大きい寝形六間取りに土間に持ち式台の痕跡もたどれる建物である。土間の中央には柱を建て、二重の梁組で大きな空間を構成しており、当時としてはかなり上等な構造である。土間面に建具はなく、ごく初期の段階では土間に格子(こうし)戸や格子窓、その上部に小壁もない時代があった古い農家の伝統をそのまま伝えていられるとされ、瀬戸内海沿岸の民家の形態をよく保存している。		
国	重要文化財(建造物)	浄土寺 方丈 1棟 唐門 1棟 庫裏及び客殿 1棟 宝庫 1棟 裏門 1棟 露滴庵 1棟 附中門 1棟 檼札 2枚 旧食堂厨子及び須弥壇 1具	じょうどじ	6棟	尾道市東久保町	昭63.12.26(県指定) 平6.7.12	方丈ノ桁行16.0m、梁間13.0m、一重、寄棟造、本瓦葺 唐門ノ一間向唐門、本瓦葺 庫裏及び客殿ノ角屋付き庫裏と客殿の複合造、切妻造、本瓦葺 宝庫ノ土蔵造、桁行6.0m、梁間3.9m、二階建、切妻造、本瓦葺 裏門ノ長屋門、桁行14.9m、梁間5.0m、切妻造、本瓦葺 露滴庵ノ三層台目茶室、水屋及び四重・四畳半の勝手よりなる、一重、入母屋造、茅葺		浄土寺は鎌倉時代(1192～1332)に始まり、尾道を代表する古刹(こさつ)の一つである。境内には本堂、多宝塔や阿弥陀堂などの中世建築と方丈などの近世建築がよく残され、統一された寺院建築群となっている。 庫裏(くら)及び客殿は享保4年(1719)建立、方丈は元禄3年(1690)尾道の豪商である橋本家が施主となって再建された。 露滴庵(ろてきあん)は、三層台目の席に水屋と後補の勝手を付属させた茶室である。豊臣秀吉が桃山城内に建てた茶室「燕庵」を移したものと伝え、文化11年(1814)向島の天満屋が浄土寺に寄進したという。いびゆる欄部(かりべ)好みの風格のある建物である。 唐門は総ケヤキ作り的小さな一間の向唐門で正徳2年(1712)建築、宝庫は二階建て土蔵で、宝暦9年(1765)建築。裏門は長屋門で18世紀後期の建築である。		関連施設:浄土寺宝物館 (0848-37-2361)

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財(建造物)	常称寺 本堂1棟 観音堂1棟 鐘撞堂1棟 大門1棟 附 墓廻門1棟	じょうしょうじ ほんどう かんのんどう かねつきどう だいまん	4棟	尾道市西久保町	平19.12.4	本堂 桁行五間、梁間六間、一重、入母屋造、本瓦葺 観音堂 桁行三間、梁間三間、一重、宝形造、 向拝一間、本瓦葺 鐘撞堂 桁行一間、梁間一間、一重、入母屋造、本瓦葺 大門 四脚門、切妻造、本瓦葺 附 墓廻門 一間葉門、本瓦葺		常称寺は、鎌倉時代後期の正応年間(1288～93年)に、時宗二代・真教によって創建されたと伝えられる寺院である。本堂は室町中期、観音堂は室町後期、鐘撞堂は江戸前期、大門は室町前期の建築とみられる。それぞれの建物は、後世の改造を受けながらも多くの当初材を残しており、往時の姿をよく伝えてい る。 本堂は、外観を和様、内部構成を禅宗様とし、内陣・外陣と脇陣を一体的空間とするなど、中世時宗本堂の特徴をよく表している。また大門は、現存する常称寺の建造物のなかでは最も古く、その重厚な構えは当時の寺格の高さを体現している。観音堂や鐘撞堂も、各時代の尾道周辺地域の意匠の特徴を備えており、当地域における建築文化の特徴を示す貴重な遺構である。 中世時宗寺院は全国的に遺存例が少なく、そのなかでも室町時代の遺構が3棟も残っている例は希少である。また、室町前期から江戸前期にわたって建てられた諸堂は、それぞれ時代的・地域的特徴をよく備えており、時宗寺院の伽藍構成の歴史的展開を理解する上で、学術的な価値が高い。		関連施設:おのみち歴史博物館(0848-37-6555)
国	重要文化財(建造物)	旧大浜崎通航潮流信号所施設 通航信号塔 基間潮流信号機 夜間潮流信号塔(大浜崎灯台) 附・圍障(上段・下段) 検潮器浪除塔 附・旗竿 石壇(上段・中段・下段)	きゅうおおはまさきつうこうしやうりゅうしんこうしよしせつ つうこうしんこうとう ひるまちやうりゅうしんこうき やかかんしやうりゅうしんこうとう(お おはまさきやうだい) けんちやうきなみよけとう	1棟3基	尾道市因島大浜町	令和6年(2024)8月15日			瀬戸内海の鉄水道、布川瀬戸に面した因島の北東端に位置する。航行船舶に交通状況や潮流の方向を告知するため設置した通航潮流信号所施設。明治43年の設置時に、通航信号塔及び昼間潮流信号機、検潮器浪除塔を新築し、同27年建設の灯台を転用して夜間潮流信号塔とした。通航信号塔は屋根上に3つの角塔を並べ、本板で○△□の記号を表示して対向船舶の位置を知らせた。現存唯一の木造信号塔として貴重。夜間潮流信号塔は信号所の廃止後、灯台として再度点灯した。近代交通機関の基盤施設が集約された本施設は、船舶の安全航行を支えた施設群として近代海上交通史上、価値が高い。		
国	重要文化財(絵画)	絹本着色仏涅槃図	けんぼんちやくしよくぶつねはんず	1幅	尾道市瀬戸田町瀬戸田	明45.2.8	絹本、八相涅槃図	縦152.4cm、横140.7cm	涅槃図は、釈迦の入滅つまり涅槃の姿を描いた図で、涅槃会(ねはんえ)の本尊として用いられるため、遺品は11世紀からあり鳥獣の数が次第に増加しその形状も機長構図から機長構図に推移している。本品は、ほぼ正方形の形状をした鎌倉時代、13世紀中頃の作である。元は大坂の神楽山寺に伝来したとされている。 八相涅槃図と称され、釈尊のこの世における主要な事跡八相入涅槃を中心に構成した図である。浄土寺本(室文)では八相を別の区画の中に描いているが、この図では区画を設けず配置しており、明恵上人作の涅槃講式の説と一致し、宋、元の涅槃図の影響を受けて成立したと推定される。		関連施設:精三寺博物館(0845-27-0800)
国	重要文化財(絵画)	紙本着色三十六歌仙切 佐竹家伝来	しほんちやくしよくさんじゅうろっかせんざれ	1幅	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭10.5.6	紙本、幅立	縦35.5cm、横78.2cm	鎌倉時代(1192～1332)に流行した歌仙絵巻の一部分である。元来上下2巻であったが、京都叢茂神社から佐竹家に移管された際、1人ずつ切りはなし掛幅仕とした。類品中에서도最も傑出するもので、書は京極良経(きょうごくりやく)、絵は藤原信実(ふじらののぶざね)の筆になると伝えられる。 本書所載の貫之(つらゆき)の巻部分は、室町時代(1333～1572)に補筆されたものである。 三十六歌仙とは、平安時代中頃(10世紀末)に藤原公任が選んだとされる代表的歌人36人のことである。 ※藤原信実(1177～?)…鎌倉時代の絵師・歌人 ※紀貫之(868?～945?)…平安時代初期の歌人		関連施設:精三寺博物館(0845-27-0800)
国	重要文化財(絵画)	絹本着色千手千眼観音像	けんぼんちやくしよくせんじやくせんがなんかんしやう	1幅	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭35.6.9	絹本着色	縦124cm、横54cm	鎌倉時代(1192～1332)の作。千手観音の図像のほとんど唯一といえる実例で、正確に千臂(千)千眼が描かれている。おそらく鎌倉時代初期、13世紀に日本列島にもたらされた中国の宋代の原本を、忠実に模写したものであろうかと思われる。筆法の厳格さと構図の巧妙さとは類例のないすぐれた作品と言える。 千手観音の千とは無量と円満の意味であり、その造像にあたっては、十八や十四に略して造られた、千手の実例は唐招提寺に見られるのみである。		関連施設:精三寺博物館(0845-27-0800)
国	重要文化財(絵画)	絹本着色仏涅槃図 左右下の各縁に涅槃の諸相がある 附 旧軸木 2本 文永十一年粉河寺僧徒覺房云々の記がある	けんぼんちやくしよくぶつねはんず	1幅	尾道市東久保町	昭43.4.25		縦174.5cm、横133.5cm	鎌倉時代、文永11年(1274)製作。 本図のように涅槃に關係の深い多くの説話をまわりに配している例は少ない。図の左側八段には主として入涅槃前の事蹟を、右側には涅槃後摩耶夫人に対する再生説法の場面を中心に描いている。 本図は古典的涅槃図の構成を脱して次第に数多くの禽獣を描きこむ過程を示している点にも注目され、人物描写にも新渡(しんた)の宋面の暈(ぼかし)りを用いている。		関連施設:浄土寺宝物館(0848-37-2361)
国	重要文化財(絵画)	紙本白描遊行上人絵 巻第二、第五、第六、第八	しほんはくびやうぎやうしやうにんえ	4巻	尾道市西久保町	昭53.6.15	巻第二／本紙々纏24枚、詞4段、絵4段 巻第五／ 巻第六／本紙々纏19枚、詞4段、絵3段 巻第六／本紙々纏17枚、詞2段、絵1段 巻第八／本紙々纏24枚、詞9段、絵3段	縦30.2cm 長さ／巻第二1,070.5cm、第五920.0cm、第六861.5cm、第八1,202.0cm	南北朝時代(1333～1392)の頃の作と考えられる。 南禅の一連環の伝説巻は、聖徳太子一連環十三巻と宗像編「遊行上人絵十巻」の二系統が伝わっているが、本品は一巻と他阿の伝記をあらわした宗像系統の、全巻白描の画法による珍しい絵巻である。特に、技法として新しく遼染した水彩画の手法と大和絵との融合をはかった面風は独特である。 ※白描…絵の技法の一つ。墨線と墨の濃淡で表現する。		
国	重要文化財(絵画)	絹本着色因果曼荼羅図 附 旧軸木 2本 文保元年二月益門の銘がある	けんぼんちやくしよくいんがまんたらす	2幅	尾道市東久保町	昭53.6.15	胎藏界／縦263.0cm、横183.5cm 金剛界／縦251.0cm、横185.0cm 旧軸木／軸長各184.0cm、軸径各5.0cm		鎌倉時代の文保元年(1317)の作。 因果曼荼羅図で、描写は伝統的な手法により、重厚な筆致と鮮やかな彩色で、きわめて精緻に描かれている。諸尊像には補筆や補彩がなく、描表具や八宝具は当初のもので、軸木に墨書で「文保元年丁巳二月四日」の銘がある。 当時の因果曼荼羅の彫彩を伝える貴重な資料である。鎌倉時代末期の仏画で年記のあるものが少ないことから考えると、制作年代が明確であり、基準事例としての価値は大い。		関連施設:浄土寺宝物館(0848-37-2361)
国	重要文化財(彫刻)	木造十一面観音立像	もくじやうしゆいちめんかんのんりやうざう	1躯	尾道市東久保町	明32.8.1	樟材、一木造	像高1.6m	浄土寺本堂の本尊で、定証起請文(じやうしやうきせうもん)にある「本尊聖徳太子御作等身金色十一面観音像」と記されているのは、おそらく本像のことであろう。 樟材のものは、右手は施無畏(せむい)の印を、左手に開敷蓮華をさした花瓶(後補)をもつ。面相は豊満で、体軀は肥大充実し、刀法も鋭く、全身を金色の袈裟に包まれた端嚴な尊容の像である。平安時代も初期に近い頃(9世紀)のすぐれた作である。		33年に一度開帳 関連施設:浄土寺宝物館(0848-37-2361)

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財(彫刻)	木造釈迦如来立像(伝安阿弥作)	もくぞうしゃかによらいりゅうぞう	1躯	尾道市西久保町	明32.8.1	寄木造、素木、玉眼	像高78cm	西國寺客殿脇間に安置されている仏像で、小柄ながらも秀麗な尊容に、よく調和のとれた彫りの深い流れるような衣文のほかに、鎌倉時代(1192～1332)の安阿弥流の特色がうかがわれる。 寺伝によると、本像は快慶の作とされ、かつては「うしろ坂」の釈迦堂の本尊であったが、御堂の炎上後、西園寺に安置することになったという。		
国	重要文化財(彫刻)	木造薬師如来坐像	もくぞうやくしにょらいざぞう	1躯	尾道市西久保町	明32.8.1	一木造	像高91cm、膝張り71cm	平安時代も初期に近い時期(9世紀)の秀作である。西園寺金堂の内陣須弥壇に安置されている本尊仏で、古来秘仏として伝来してきたものである。優麗ながらも森厳にして荘重な趣をたえた、重量感のある仏像で、螺髻(らほつ)は切付けて、彩色のない素木の古い高雅さが感じられる。 寺伝によると、讃岐普通寺(ぜんつうじ)から迎えた弘法大師の「七仏薬師」のひとつと言われる。		
国	重要文化財(彫刻)	木造千手観音立像	もくぞうせんじゅかんのりゅうぞう	1躯	尾道市東土堂町	明32.8.1	一木造	像高106cm	平安時代(794～1191)の作。 千手観音で真数千手のものは数点しかなく、ほとんどが合掌手、宝鉢手の他に両脇に十九本の脇手があつた十二臂(じふに)像がごく一般的である。本像も四十二臂像で、彩色は剥落しているが、かえって木目が美しく効果的にあらわれている。 寺伝では行基菩薩作とされ、向島余崎城主で村上水軍の将鳥居資長が寄進したものと伝え、その念持仏として船中に選持し、風浪を凌いだので、「浪文観音」の俗称もある。		
国	重要文化財(彫刻)	木造聖徳太子立像(開山堂安置) 乾元二年ノ銘アリ	もくぞうしょうとたいしりゅうぞう	1軀	尾道市東久保町	大1.9.3	寄木造、玉眼、彩色、髪をみづらに結い、柄香炉を持つ。	像高94cm	鎌倉時代の乾元2年(1303)、沙弥定証(じょうしょう)が息子の死後にその菩提を弔うために作らせた像といわれる。京の院派の仏師・院蓋が作った。 「孝養像」と称されるもので、玉眼で彩色され、髪はみづらを結い、両手で柄香炉(えごろう)を持った姿である。胎内頭部に「乾元二年法印院蓋作」という墨書がある。定証起請文(じょうしょうきしょうもん)に「聖徳太子十六歳御葬、京都仏師印蓋作」というのは像と想われる。 文獻と銘文が照応する遺物は珍しい。鎌倉時代末期(14世紀前半)院派の佳作である。		関連施設: 浄土寺宝物館(0848-37-2361)
国	重要文化財(彫刻)	木造聖徳太子立像(開山堂安置)	もくぞうしょうとたいしりゅうぞう	1軀	尾道市東久保町	大1.9.3	寄木造、玉眼、彩色、左手に柄香炉、右手に笏を持つ。	像高1.35m	南北朝時代、暦応2年(1339)の作で、胎内に墨書銘がある。 「撰政(せんせい)像」と称せられるもので、玉眼で彩色されている。撰政像は必ず笏(しやく)を両手で持っているものであるが、本像は左手に柄香炉(えごろう)、右手に笏を持っており、撰政像の影響を受けた孝養像の一変形と思われ、同様のものは南北朝時代(1333～1392)前後からその例があらわれる。 同種の太子像中の秀作である。		関連施設: 浄土寺宝物館(0848-37-2361)
国	重要文化財(彫刻)	木造釈迦如来立像	もくぞうしゃかによらいりゅうぞう	1軀	尾道市瀬戸田町瀬戸田	大4.3.26	本体・台座ともカヤの一木造	像高135cm	平安時代初期、9世紀の作と思われる作品で、当時の造像によく見られる本体と台座を櫃(かや)の一木から彫り出した、重厚森厳な仏像である。伊勢神宮の神宮寺にあったものといわれる。 釈迦牟尼(むに)とは「釈迦族の聖者」の意味で、苦行の後に悟りを得て慈悲と智慧(ちえ)により衆生(しゅうじょう)を済度(さいど)した仏教の祖である。その釈尊は久遠常住(くおんじょうじゅう)の仏である釈迦如来として多くの経典の教主とされており、日本においても仏教伝来以後多くの造像が行われた。		関連施設: 精三寺博物館(0845-27-0800)
国	重要文化財(彫刻)	木造阿弥陀如来坐像	もくぞうあみだにょらいざぞう	1軀	尾道市瀬戸田町御寺	昭3.8.17	寄木造、漆箔、玉眼	像高83cm	真言宗光明坊の本尊で、漆箔で玉眼入り。下品上生の印を結ぶこの仏像は、鎌倉時代(1192～1332)の作であるが、面相は丸味がありふつふつしており、衣文の緩みやわらかく、平安風の匂いを感じさせる秀作である。寺伝によると行基菩薩の作であるという。		
国	重要文化財(彫刻)	木造浄土曼荼羅刻出籠	もくぞうじょうとまんだらこくしゅつがん	1基	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭10.4.30	檀木を用いて浄土曼荼羅を精巧に彫り出した小形の厨子	縦13.5cm、横14cm、奥行4cm	龕(がん)とは、本来は塔の下の室という意味で、厨子状に割く(C)られた(ぼ)の中に納められた像を龕像といふ。小型のものは諸國を巡る僧侶が携帯していた例が多い。 この龕は檀木を用いて浄土曼荼羅を精巧に彫り出した小形の厨子である。一木から室樓閣や七宝の池などに、弥陀三尊をはじめ、十大弟子、二十五菩薩、四天、二力士など五尊仏の諸尊や鳳首の舟などを克明に彫り起して極楽浄土を表現しており、すぐれた技法による精巧で構成の巧みな作品である。 平安時代、12世紀の作。厨子の裏面に「高野山無量寿院頼運」の朱漆銘がある。		関連施設: 精三寺博物館(0845-27-0800)
国	重要文化財(彫刻)	木造聖徳太子立像(南無仏太子像) 頭部内面に建武五年十月廿四日院勢作ノ銘アリ	もくぞうしょうとたいしりゅうぞう(なむたいていぞう)	1軀	尾道市東久保町	昭11.9.18	寄木造、玉眼、彩色	像高68cm	南北朝時代、建武5年(1337)の作。胎内頭部に「建武五年十月二十四日院勢作」の墨書銘がある。 「南無仏のお姿」と称されるもので、玉眼入りの彩色された像である。三尊の尊像とされる。上半身は球形で下半身に脚の姿を着け合掌する姿である。同じ胎内から出た三尊仏の印仏(いんぶつ)には、本寺重修に尽力した道達、道性の名も見られ、本寺と太子信仰の関係も察せられる貴重な作品である。なお、作者の院勢は、孝養像の作者院蓋と同じ京都院派の著名な仏師である。		関連施設: 浄土寺宝物館(0848-37-2361)

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財(彫刻)	木造阿彌陀如来坐像 像内二藤原行光/顯文及名号等ヲ納ム	もくそうあみだにょらいりやうどう	1軀	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭14.9.8	寄木造、漆箔	像高60cm	鎌倉時代、天福元年(1233)の作。小像ではあるが、漆箔の上に精緻な截金(きりがね)を施した秀麗な阿彌陀流のおだやかな作品で、胎内の空洞を金箔ではりつけた珍しい例の仏像である。 その胎内には承久元年(1219)に卒した藤原行光の自筆文書と千字の名号及び顯文が納入されていた。顯文には天福元年の年紀があり、木像は、行光の十五回忌にその長巻を祈るために造られたものであろうとされる。 行光は源頼朝、義朝の縁につながる人物で、長門丞、政所執事、信濃守などの要職にあった。		関連施設: 耕三寺博物館 (0845-27-0800)
国	重要文化財(彫刻)	木造十一面観音立像	もくじゅういちめんかんおんたつどう	1軀	尾道市梶山田甲	昭24.2.18	一木造、上下二段の背割りがある。素木	像高190cm	平安時代(794~1191)の作。摩訶衍(まかえん)寺の本尊で、冠帯は欠いているが天冠台を彫り出し、彫刻の像は、柔肩(じょうはく)をつけ腕馴(わんぜん)を彫り出している。すこぶる重宝感のある堂々とした像であるが、天衣や裳の彫は比較的浅い。背面の胸背部と腕部に内割(うちわり)があるが、その納入品についての寺伝はない。この像は、たびたび災禍にあったためか、彩色はほとんど剥落し、化仏、手足や天衣の先端は欠失し、現存のそれらは後補である。		
国	重要文化財(彫刻)	木造仏涅槃像	もくじゅうぶつねはんどう	1軀	尾道市御調町市	昭24.2.18	寄木造、漆箔、玉眼	像高150cm	鎌倉時代(1192~1332)の作。 涅槃とは、一切煩惱の業障を脱して迷界に再生する業因を滅却した境地と言われ、釈迦の死の時を言う。釈迦が双蓮(さうじゆ)の下で右脇を下にして横臥し、その周囲をとりまいて、釈迦の弟子の僧達や俗人から鬼人、動物が悲嘆し慟哭している有様を描いた涅槃図は多いが、技術的にむづかしい彫刻は少ない。 本像は玉眼入り漆箔の等身次の数少ない涅槃像のひとつである。「塚原綱とも俗称されるこの像の現存する最古のものには、法隆寺五重塔の初重階の涅槃像(8世紀)、奈良明日香村の岡寺のもの(天智時代(6世紀中葉))、他に本像と同じ鎌倉時代のものが香川県の観音寺にある。		
国	重要文化財(彫刻)	木造阿彌陀如来坐像 像内に巧匠阿彌陀仏、伊豆御山常行常脚仏、建仁元年十月口日銘がある	もくじゅうあみだにょらいざどう	1軀	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭38.2.14	寄木造、漆箔、裳懸座にのる	像高74.0cm	漆箔で裳懸座(もかけざ)に坐るこの像は、銘文にあるようにもとは伊豆山権現(走湯山、神奈川県)常行堂の本尊であったもので、鎌倉時代、建仁元年(1201)快庵(安阿弥、あんなみ)の若い時代の作品である。形を整った阿彌陀流のおだやかな作風のもので、宝冠をつけた、阿彌陀像としては珍しい形式の仏像である。		関連施設: 耕三寺博物館 (0845-27-0800)
国	重要文化財(彫刻)	木造観音菩薩立像 附 木造観音普賢立像 1軀	もくじゅうかんのんぼざつりやうどう	1軀	尾道市向東町	昭52.6.11	一木造	像高178.0cm	等身の一本木像で、両幅広(量感豊かな)体軀や翻波(ほんば)風の衣文には平安時代初期(9世紀)の余風を伝えているが、総体におだやかなさが顕著になっており、10世紀の製作と考えられる。堂々とした風格があり、保存も比較的良く、備前地方の平安古像を代表するすぐれた作品である。 付(つけ)だりの普賢像は本品と一緒に伝えたものであるが、作風に地方風が強く、この地方の造像傾向の変遷の一端をつかう造像として価値がある。11世紀の作と考えられる。		
国	重要文化財(工芸品)	銅製五鈷鈴(伝僧空海傳來)	どうせいごこけい	1口	尾道市西久保町	明32.8.1	銅製	高さ22cm、口径5.5cm	五鈷鈴は金剛鈴と総称されるもの一つで、密教修法の時、諸尊を驚覚歡喜させ、眠っている仏を呼びさますために用いられる。本品は鈴身に仏像を鑄出した五鈷仏像鈴で、その仏像の種類によって梵天帝釈四天鈴(ぼんでんたいしやくしてんれい)と称されるものである。把柄(つかえ)は蓮華をかたどり、五鈷は獅子の爪の形をした精巧な細工の造品で、寺伝に弘法大師傳來という晩唐期(9世紀頃)の作品である。		
国	重要文化財(工芸品)	錫杖	しゃくじょう	1柄	尾道市西久保町	明44.4.17	銅製	長さ79.6cm	錫杖は有聲杖とも言われ、頭部の輪形に遊錘(ゆうかかん)を通し、これを持って音を出すものである。錫杖の由来は仏教初伝の頃と言われ、長さは等身丈で、字の取杖として用いられていたが、後には柄を短くして手錫杖とされ、杖としては法華の時の梵音具として用いられるようになった。この錫杖も「手錫杖」で、双竜の頭に蓮華をかたどった花瓶をかき、竜尾で錫杖の輪をかたどり、頂上に定印(じやういん)の三尊仏を配し、朱色の短い杖をつけた精巧な品である。寺伝では弘法大師傳來という晩唐(9世紀ごろ)の作である。		
国	重要文化財(工芸品)	唐花籠蓋八稜鏡	どうかえんおうはちりやうきやう	1面	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭17.12.22		直径29.5cm	この鏡は、伊勢神宮の神官の系譜の家に伝承されたもので、花窓とも言うべき蓋が紐の周囲にあり、内外区の界隈もあるが、内外の文様は同一系統であるので自由に連絡している。蓋(蓮華のおしどり)と唐花は相対しており、その意は優美清麗で、錫杖(ちゅうぼう)も非常にすぐれており、保存も完好な鎌倉時代(1192~1332)における和鏡の造品である。		関連施設: 耕三寺博物館 (0845-27-0800)
国	重要文化財(工芸品)	孔雀倉戈金経箱 蓋裏に「延祐二年権梁禪正明應寺前宋家造」外底に「延文三年六月」の銘がある	くじやくそうきんきやうばこ	1合	尾道市東久保町	昭30.2.2		縦40cm、横22cm、高さ25cm	中国南部の杭州で、元の延祐2年(1315)に製作された箱である。その後、日本に輸入され、南北朝時代の延文3年(1358)には浄土寺で最勝王経の箱とされた。 内部に朱漆、外面に黒漆をほどこし、孔雀文が彫られている。蓋に「首」、身に「性」の文字が彫られ、蓋裏に「延祐二年云々」の黒漆銘、外底に「備後国尾道云々」の朱漆銘がある。 元からの舶来品で、製作年代、製作地、製作者が明らかな中国漆芸史上の貴重な遺品で、製作年の明記がこれだけ(日本では漆文と呼ばれる技術)作品としては最古のものである。 光明坊(豊田郡瀬戸田町)のものと同姉妹品で、大きさ及び銘文はほとんど同じである。また、浄土寺の孔雀文沈金経箱とは大きさは違いますが、意匠などはほとんど同一である。		奈良国立博物館に寄託 関連施設: 浄土寺宝物館 (0848-37-2361)

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財(工芸品)	孔雀文金経箱 蓋裏に「延祐二年棟梁禪正杭州油局横金家造」 内底に「延祐二年棟梁禪正」の銘がある	くじゃくそうきんきょうばこ	1合	尾道市瀬戸田町御寺	昭30.2.2		高さ25.2cm、縦39.8cm、横22.3cm	浄土寺(尾道市)旧蔵のもので、浄土寺にある「孔雀文沈金経箱」(重文)「孔雀[84a]金経箱」(重文)の二合とは姉妹品で、特に後者は大きき及び銘文はほとんど同じである。黒漆塗の面に孔雀と宝相華(ほうそうけ)の文様をきわめて精緻に[84a]金彫りした精巧な船載の工芸品で、刀技は単純純粋、形態は素雅な元時代(1271～1368)の漆工の名品である。延祐2年(1315)銘がある。		東京国立博物館に寄託
国	重要文化財(工芸品)	銅水瓶	どうすいびょう	1口	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭34.6.27		高さ27.5cm、胴径13.7cm	水瓶は、もともとは僧侶が仏道修行に必要とする用具の一つであったが、供養具として仏前の献水に用いられるようになったものである。この水瓶は、獅子のつまみのある蓋がついた鎌倉時代(1192～1332)の作で、志貴山形水瓶と呼ばれる形のものである。やや太直で、肩に水平の面取りを作り、長い注口と把手をつけるという形をしている。この形態の水瓶は法会の際の湯(とう)瓶に用いられることもある。		関連施設: 耕三寺博物館(0845-27-0800)
国	重要文化財(工芸品)	金銅五鈴鉢 附 金銅五鈴杵 1口 金銅金剛盤 1面	こんどうごこれい	1口	尾道市西久保町	昭36.2.17	金銅製、鋳造品	五鈴鉢/高さ21.5cm、口径9.8cm 五鈴杵/長さ19.8cm 金剛盤/長径26.1cm	この五鈴鉢は、中帯に輪宝文を、肩帯に独鉢、口帯に三鈴を鑄出している珍しい作で、精緻な細工を施した形跡がある。五鈴杵・金剛盤とともに一具として保存する鎌倉時代初期(12世紀末～13世紀初め)の製作である。寺伝によると、この一具は白河法皇から西園寺中興の僧侶に下賜されたものであるという。		
国	重要文化財(工芸品)	孔雀文沈金経箱	くじゃくもんちんきんきょうばこ	1合	尾道市東久保町	昭44.6.20		縦54cm、横36cm、高さ29cm	尾道浄土寺に伝わる元の時代(1271～1368)の作品で、延祐2年(1315)銘の浄土寺所有孔雀[84a]金(くじゃくそうきん)経箱や光明坊所有孔雀[84a]金経箱と意匠がほとんど同じことから、同時代に製作されたと思われる。印籠蓋造りで、蓋裏には黒漆塗を施し、身の長側に双孔雀、短側面には双尾長鳥文、蓋の側面には唐花文をそれぞれ沈金で埋めつけて、蓋の正面に「天」、身の四隅に「住・静・情・造」の文字を薬研形にしている。蓋と身の内部は朱漆である。		関連施設: 浄土寺宝物館(0848-37-2361)
国	重要文化財(典籍)	紙本墨書観世音法楽和歌 建武三年五月五日尊氏証判アリ	しほんぼくしよかんげおんほうらくわか	1巻	尾道市東久保町	明37.8.29	宝相華文紺表紙、紺紙金泥		足利尊氏は建武政府に反して間もなく九州に敗退したが、その途中浄土寺に船を寄せて本尊の観世音菩薩に敬進挽回の祈願をしている。その後数ヶ月で勢を回復した足利尊氏が上洛の途中の建武3年(1336)5月5日、再び浄土寺観音堂に参籠した時、尊氏と弟の直義等6人が本尊十一面観音菩薩の前で、観音信仰の和歌33首を詠じて室前に供したものである。この中に尊氏の詠歌は7首で、巻頭の花押は尊氏の証判である。		関連施設: 浄土寺宝物館(0848-37-2361)
国	重要文化財(典籍)	紙本墨書定証起請文 嘉元四年トアリ 附 同案文(残簡)1通	しほんぼくしよじょうしきうきしやうもん	1巻	尾道市東久保町	明43.4.20	巻初は金字銀字の交書、紺紙金銀泥	縦27.5cm、横67.1cm	鎌倉時代の嘉元4年(1306)、真言律宗の西大寺叡尊(1201～1290)の弟子定証が浄土寺の伽藍を再建した時の自筆起請文である。定証以前の浄土寺は紀州高野山に所属し、尾道の入光阿弥陀仏の外護によって本堂・五重塔・多宝塔・地藏堂、鐘樓などが建てられていたが、専属の僧侶もあらず閑寂していた。浄土寺が定証に寄進される以前の勧進によって更に金堂・食堂・僧房・厨舎が造営され、広範な地域の人々の信仰を集める活気のある寺となったことが記されている。文書は更に続き、嘉元元年(1303)の舎堂落成のほか、嘉元4年に行われた盛大な落慶供養の次第も詳細に記され、その文書中に見える定証の朱色の手印があざやかである。当時の盛衰を知る資料である。		関連施設: 浄土寺宝物館(0848-37-2361)
国	重要文化財(典籍)	紙本墨書浄土寺文書 寺領注文建武四年十月日トアリ通、尊氏寄進状外9通	しほんぼくしよじょうどじもんじよ	1幅	尾道市東久保町	明43.4.20	紙本墨書	縦27.6cm、横118.0cm	浄土寺に所蔵されている中世文書115通のうち11通である。浄土寺領因島地頭方年貢注文や足利尊氏寄進状、足利義満御判御教書など、南北朝時代(14世紀)から室町時代前期(15世紀前半)の古文書の一部である。年貢注文は、浄土寺領因島(因島市)にある中庄・重井庄・三津庄地頭方の建武4年(1337)の年貢数量の注進状で、文中の年貢の中に千六百六十五徳三斗五升六合(八百三十二石八斗六升五合)にのぼる多量の値がみられる点が注目される。尊氏寄進状は浄土寺におかれた備後国利生塔に対し、備後得長鎮(現在那珂大和町)の地頭職を寄進するものである。なお、後醍醐天皇崩御(1333)をよめとする残る104通は県指定重要文化財である。		関連施設: 浄土寺宝物館(0848-37-2361)
国	重要文化財(典籍)	紺紙金銀泥法華経巻第七 天曆三年ノ奥書アリ	こんしきんぎんでいほけきょう	1巻	尾道市東久保町	明43.4.20	紙本	縦34.2cm、横92.4cm	平安時代中期(10世紀)の装飾経。法華経の巻第七の巻初は金字の行と銀字の行を1行ごとに交互に記し、後縁は金泥(きんでい)書きにしたものである。巻末に、天曆3年(949)6月22日に紀則常と女性の物部氏が地主として奉仕した旨の奥書があり、平安時代中期における金銀交書(こうしよ)経として注目される経巻である。軸端は、撥型(ぼちがた)で、鯉魚金々子(とぎんなご)地宝相華文である。		関連施設: 浄土寺宝物館(0848-37-2361)
国	重要文化財(典籍)	紙本墨書大般若経巻第九十九 「薬師寺印」未印並二「薬師寺金堂」ノ黒印アリ	しほんぼくしよだいはんはんきょう	1巻	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭10.4.30	紙本墨書	縦32.1cm、横35.8cm	「魚養経(ぎょうきょう)」と呼ばれる古くから明野宿弥魚養(うおや)発願経と伝えられるもの一巻で、奈良時代(8世紀)の代表的な写経のひとつである。魚養は奈良時代末から平安時代初期(8世紀終り～9世紀初め)にかけての人物で、医者であり能書家として知られる。もとは奈良薬師寺に伝わったもので、天平字9年から宝龜元年(765～770)に写されたと言われる。		関連施設: 耕三寺博物館(0845-27-0800)

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財(典籍)	紙本墨書正親町天皇宸翰御消息(青蓮院宛)	しほんぼくしよおきまちてんのうしんかんみしょうそく	1幅	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭10.4.30	綴葉装、平仮名	縦14.4cm、横12.4cm	戦国時代から安土桃山時代の天皇、正親町天皇(在位1557～1586)が京都の青蓮院(しょうれんいん)門跡(もんぜき)に宛てた書状である。新年のお祝いに對して返礼を述べたもので、ちらし書きで記されている。正親町天皇は、天皇位を継いだ後3年を経て即位礼をあげたことで知られる。		関連施設: 精三寺博物館 (0845-27-0800)
国	重要文化財(典籍)	紙本墨書陽光院御筆御消息(五月十五日青蓮院宛)	しほんぼくしよようこういんわんひつみしょうそく	1幅	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭10.4.30	紙本墨書、折本	26.0×10.8cm(第1巻表紙)	陽光院は正親町天皇の第一皇子・誠仁(さねひと)親王の死後に追贈された尊号である。織田信長によって次代の天皇候補とされ、信長の死後も即位真近と見られていたが、天正14年(1586)に病没した。天正18年(1588)、誠仁親王が青蓮院尊朝親王にあてた書状で、大和の多武峯(とうのみね、奈良県)が勅願所であることから、天下が静まったこの時に内大臣・豊田秀吉の尽力を依頼するよう求めている。		関連施設: 精三寺博物館 (0845-27-0800)
国	重要文化財(典籍)	紙本墨書別異弘願性戒抄	しほんぼくしよべついつくがんしやうかいしやう	1帖	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭10.4.30	表紙は宝相華唐草文、見返し絵。軸は鍍金装形。	縦25.8cm、全長85～148cm	鎌倉時代(1192～1332年)の天台座主(ざす)・慈円(1155～1225年)が筆者と伝えられる書籍。京都・青蓮院に伝来した鎌倉時代中期の浄土系系統の注釈書の一つである。綴葉(でらう)装で、別異弘願すなわち弥陀四十八願について往生礼讃及び観経疏の注釈を加えたもので、平仮名書きであることは、鎌倉時代の念仏思想の一端を示す好資料である。 ※慈円…藤原忠通の子。歌人であり史書「愚管抄」の著者として知られる。		関連施設: 精三寺博物館 (0845-27-0800)
国	重要文化財(典籍)	貴之家歌合	つらゆきけいたあわせ	1巻	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭36.2.17	紙本墨書	縦28.3cm、全長9.22cm、	歌合(うたあわせ)とは、平安時代初期(9世紀前半)以来貴族や貴族の間で流行した遊戯で、左右に分れた歌人がその詠んだ歌を左右一首ずつを組み合わせ、優劣を争いその多少によって勝負を競う遊びである。この一巻は、平安時代後期(11世紀後半～12世紀)、藤原忠通の命で仁和年間から大治年間(885～1131)に行われた歌合を類別編集した「類聚歌合」20巻本の巻十七の一部である。筆者の確証はないが、藤原後忠兼と伝えられる「二条切(にじょうざき)」の一冊である。天慶9年(938)前百首題で催された紀貫之(きのつらゆき)家の歌合の歌六番十二首を収めた断簡で、和歌資料として貴重なものである。 ※紀貫之(868?～945?)…平安時代初期の歌人		関連施設: 精三寺博物館 (0845-27-0800)
国	重要文化財(考古資料)	日向国児湯郡特田古墳出土品 面文帝神鏡1面、菱形四獣鏡1面	ひやうがのくにこゆくちもちだこみんしやうどひんがもんたいしんじやうきやうへんけいしじやうきやう	2面	尾道市瀬戸田町瀬戸田	昭37.6.21	面文帝神鏡(中国鏡、平縁、四神四獣鏡) 菱形四獣鏡(倭製)	面文帝神鏡/直径21cm 菱形四獣鏡/直径20cm	持田古墳群第25号墳(宮崎県児湯郡高鍋町持田)出土の青銅鏡。面文帝神鏡は、中国六朝(りちやう)時代(3～7世紀はじめ)の鑄造と思われる平縁の四神四獣鏡で、紐(ちゆう)をわりまいて有節重環文(ゆうせつじゆうもん)があり、その内区に神像龍虎を大きくあらわし、それらの間に随従する数多の神人高獣(かんじゆう)が鑄出されている。内区には半円方形帯、外区内側に高獣四帯を、外側には菱形文帯をめぐらしている。銘文がある。菱形四獣鏡は、倭製とされ、内区四獣頭部には又角(しゃかく)が認められ、外縁に「火竟」の二文字を鑄刻(こく)している。 ※持田古墳群…5～6世紀の古墳群		関連施設: 精三寺博物館 (0845-27-0800)
国	名勝	浄土寺庭園	じやうどじていえん		尾道市東久保町	昭52.5.7			浄土寺境内の西北部、方丈(ほうじやう)と庫裡(く)と共に東南を囲まれた築山泉水(せんすい)庭である。山脚を利用して築山を構え、前面自砂敷との間に細い池を設ける。築山一帯に多数の石を配し、中央滝の石組には特に意匠を凝らしてある。方丈と書院から飛石を打ち並べ、築山の両側から築山背後の茶室・露滴庵(ろてきあん)の露地に続いている。ソテツやツツジ等の刈込植物が多い。寺蔵の古絵図によって本庭は文化3年(1806)長谷川千柳によって作庭され、いわゆる「行の築庭」の様式によったものであることが知られる。また、この絵図によって作庭当初の地割と石組が良く保存されていることが明らかである。		関連施設: 浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
県	重要文化財(建造物)	西園寺仁王門	さいにくじにおうもん	1棟	尾道市西久保町	昭44.4.28	三間一戸、入母屋造、本瓦葺。		江戸時代の慶安元年(1648)の建立の仁王門である。県内で数少ない様門形式の仁王門で、建立年代からは比較的古い様式でまとめられた、格調の高い建物である。元文3年(1740)の修繕があり、その時の修繕で、尾道の豪商・泉屋新助を施主に、大工を藤原五良兵衛として、大工194人屋根葺き職人21人、大工191人、合力大工212人が従事し、瓦2800枚を追加したことが知られる。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色弘法大師絵伝	けんぼんちやくしよくこうぼうだいしえてん	8幅	尾道市東久保町	昭30.3.30	絹本着色	縦152cm、横96cm	室町時代中期(15世紀)に製作された、弘法大師の一生を説く絵伝である。この類の絵伝は各地に多く残されているが、この絵は各部分とも力強い筆致のみことな絵伝である。第一軸は「大願堂から入来寺絵伝」まで、第二軸は「入唐から清水写書」まで、第三軸は「唐果祥興から三鼓接巻」、第四軸には「応天文投筆から二荒日光まで」、第五軸には「東寺勧講から二間修法」まで、第六軸には「高野尋入から入定御祥見」まで、第七軸と第八軸は2幅1組でストーリーがつづられ「陸博参詣」と第八軸「法皇行幸」が描かれている。また、図の下から上ヘストリーが展開している。		関連施設: 浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
県	重要文化財(絵画)	絹本着色弘法大師像	けんぼんちやくしよくこうぼうだいしぞう	1幅	尾道市西久保町	昭30.3.30	絹本着色	縦78cm、横39cm	高野山の真如親王筆の御影の系統に属する作品で、小幅ながらその幅下に高野壇上伽藍の景を描いているのは珍しく、その布置から見て天保3年(1837)の一部伽藍の焼失以前の情景を描いたものと思われる。それから判断して鎌倉時代末期(14世紀前半)の作かと考えられる。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(絵画)	絹本着色地藏菩薩像	けんぼんちやくしよくじぞうぼさつどう	1幅	尾道市西久保町	昭30.3.30	絹本着色	縦110cm, 横55cm	<p>地藏菩薩は、六道の衆生を救う菩薩と言われ、わけても地獄における救済の力を中心として信仰され、わが国では平安時代中期から鎌倉時代(1185～1332)にかけて信仰が盛んになり、庶民生活と結びつき、その造像、絵画は多い。</p> <p>本品も、そのような室町時代(1333～1572)に描かれたと思われる作品で、左足を下げ、右足を立膝にして岩座に坐す。右手を顔にそえ、左手には錫杖(しゃくじょう)を持ち、左右に掌童子、掌童子の二童子を配した延命地藏菩薩の像である。彩色は截金(きりかね)・金泥・緑青や朱を用いて精緻に描いた色彩豊かな画像である。</p>		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色法然上人像	けんぼんちやくしよくほうねんしやうにんぞう	1幅	尾道市東土堂町	昭37.7.20	絹本着色 軸装	縦69cm, 横42cm	<p>浄土宗の光明寺に古くから伝わる画像で、黒の法衣をまとい高麗縁(こうらいり)の雲に坐り、数珠を手にし頬骨を高く額は二段に描かれたいわゆる法然頭である。法然の画像としてはごく古いもので、寺伝によると円光大師(法然)自筆の摹影というが、画面に建暦元年(1378～1381)正月六日とあり、室町時代初期(14世紀)の作であることが知られる。</p>		
県	重要文化財(絵画)	絵馬(緑鳥毛○毛) ※緑の俗字、○は馬へに緑のツクリ	えま(そうもうりよくもう)	2面	尾道市東久保町	昭41.4.28		縦158cm, 横176cm	<p>天正5年(1577)播州明石郡船上山(ふなげ)(現在の兵庫県明石市船上山町)の石井与次郎兵衛尉が奉納した絵馬。</p> <p>2枚1対の大形の絵馬で、細い縁に杉材の薄板を縦に貼り合わせ、その表面に紙を張り、首をあげた(840)毛の馬と首をふした姿の24年11歳の馬を一匹ずつ墨書淡彩で描いたものである。いづれも机に横たわっており、鞍はつけしていない筆力雄健な絵である。</p> <p>奉納者の石井与次郎兵衛は、後に豊臣政権の水軍の一員としてその名がみえる人物であり、瀬戸内の海上交易に従事していたと推測される。安土桃山時代(1573～1602)の尾道と瀬戸内の海上交通の実態をうかがわせる資料となっている。</p>		関連施設: 浄土寺宝物館(0848-37-2361)
県	重要文化財(絵画)	光明本尊	こうみょうほんぞん	1幅	尾道市久保町	昭41.4.28	絹本着色 軸装	縦149cm, 横91cm	<p>光明本尊は初期真宗教団の礼拝の対象として使用されたもので、古くは三幅一対であったが、その後一帯のものも一般的となった。</p> <p>本品は南北朝時代(1333～1392)のもと考えられ、本願寺覚如の子・存覚が自筆の画像を宝田院とともに与えたと伝える。</p> <p>中央に「南無不可思議光如來」の九字の尊号を記し、左下隅に「壽命尽万無量光如來」の十字尊号、右下隅に「南無阿彌陀仏」の六字尊号を記す。釈迦、弥勒の二尊像を描いている。そして右に天竺(てんしよ)・震旦(しんたん)の十高僧を、左に和朝の僧を描き、その下部に聖徳大師像を加えている。光明本尊は東日本には多いが、西日本には少なく貴重な資料である。</p> <p>福善寺は天正元年(1573)行業法師が開いた浄土真宗寺院。</p>		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色春日曼荼羅	けんぼんちやくしよくかすがぼんだら	1幅	尾道市西久保町	昭44.4.28	絹本着色 軸装	縦99cm, 横36.4cm	<p>曼荼羅には、儀軌(ぎぎ)によって密教の根本理念を図式化したものと、特殊な尊像を中心にその曼荼羅が興あつた加持祈禱の際に奉應(ほうおう)せられる別尊曼荼羅がある。</p> <p>本品は「春日曼荼羅」と称される別尊曼荼羅のひとつで、上方に道山を描き、中央に本地仏を下方に春日大社の御使いと言われる神鹿の立つ姿を描いている。破壊も少なく保存も良好な室町時代(1333～1572)の作である。</p>		
県	重要文化財(絵画)	刺繍阿彌陀三尊種子曼荼羅	ししゅうあみださんぞんしよしまんだら	1幅	尾道市西久保町	昭44.4.28	絹糸刺繍 軸装	縦73cm, 横27.5cm	<p>着色絹糸で上方に天蓋を刺繍し、中央の三尊の円光の中の蓮座に、毛髪で刺繍した蓮子が宿る。その下には三組の円札上に火舎、花瓶を刺繍して供え、三尊を祀る形をあらわしている。蓮座蓮弁の糸は、暹羅(しよんらん)式の色調であらわし美麗である。表装中廻しの裂の上方には散華、下方には蓮池を織った豪華なもので、刺繍技術を知うるうえに貴重な。室町時代(1333～1572)の作。</p>		
県	重要文化財(絵画)	絹本淡彩楊柳観音像(巖絶道沖の贊あり)	けんぼんたんさいようりやうかんのんぞう	1幅	尾道市東土堂町	昭54.11.2	絹本白描淡彩 軸装	縦35.7cm, 横18.4cm	<p>古くから仏画の面額として愛好され、種々の病理の消除を本誓とするという楊柳観音を描いたもので、小幡ではあるが、繊細流麗な墨線は像の隅々にまで生きており、特に宝冠の描写は精緻である。寺伝によると牧翁(もつげい)筆といわれるが落款等もなく、確認の根拠を欠いているものの画面上部の巖絶道沖(ぎぜつどうちゆう)の贊により、南宋時代(12～13世紀)のすぐれた画工の手になる作品であることはうなずける。</p> <p>なお、贊者巖絶道沖(ぎぜつどうちゆう)は、淳祐10年(1250)に死去しているから、この作品は13世紀半ば以前のものとと思われる。</p> <p>光明寺は、南北朝時代初期(14世紀前半)、足利尊氏の従軍僧によって天台宗から浄土宗に改宗したと伝えられる。</p>		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色地藏菩薩十王像	けんぼんちやくしよくじぞうぼさつじやうおうぞう	1幅	尾道市東土堂町	昭55.6.24	絹本着色 軸装	縦94.3cm, 横86.0cm	<p>寛治41年(1562)朝鮮半島で描かれた仏画で、李朝朝鮮の国王や王妃等の寿命長久と国土の安泰、人民の安寧、仏法興隆を願って、清平山人が描いたもの。この十王像一面を描き清平寺に安置して香をたき、聖にその功德を一切衆生に及ぼすことを祈念したと記す。</p> <p>中央に地藏菩薩。その周辺に仏法を守護し死者を救く十王を描く。</p> <p>光明寺は浄土宗寺院である。</p>		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色如意輪観音像	けんぼんちやくしよくいらいんかんのんぞう	1幅	尾道市東久保町	昭62.3.30		縦80cm, 横40.5cm	<p>南北朝時代の建武元年(1334)の作で、図の右下に墨書銘が見える。寺伝では足利尊氏が寄進したという。</p> <p>六臂(む)の如意輪観音を墨線で描き、彩色はほとんどない。水墨画的な淡彩の画像は鎌倉時代末期から室町時代(1333～1572年)にかけて出始め、それは仏画本来の礼拝の対象としてのものから造像的な尊像と移行することを意味するものと言われる。本画像は、上記のような絵画史的な見解とその記年路がほぼ一致する点からみて、貴重な資料であると考えられる。</p> <p>如意輪観音は、変化観音の一つで、如意とは如意宝珠、輪とは法輪を意味し、それらの功德によって衆生の苦を抜き、楽を与える観音である。像形には二臂、四臂、六臂、八臂、十臂、十二臂等があるが、六臂の例が多く流布しており、その最も著名な例としては、大坂観心寺の木造如意輪観音坐像があげられる。</p>		

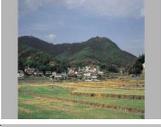
国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(絵画)	絹本着色千手観音像	けんぽんちやくしよせんじゆかんのんぞう	1幅	尾道市東久保町	昭62.3.30		縦171cm、横82cm	鎌倉時代末期(14世紀前半)の作と推定される。 経典的な観点からは、画面下方の濃褐色の岩、上方の濃紺の岩山や虚空、そうした暗いバックを背景として、画面に二十七八部像を並べて中央に大きな金色の千手観音、上方に同じ金色の五観音が浮かび上がるように鮮やかに表現されているのはまことに優美である。千手観音のやや細面であらうそうなるが、元末期(14世紀)の画法の影響が見られるようである。光背(ごうはい)の文様にも見られるように繊細な表現がよくなされてあり、六観音を一回であらわす特異さにも注目すべきところである。 千手観音は四十本の腕手を持ち、舟形光背を負っている。 画面向かって左下に「備後國尾道浦」、右下に「浄土寺常住」の墨書銘が認められ、本画像が浄土寺伝来の什物であることが明らかである。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色浄土曼荼羅	けんぽんちやくしよくじよとまんだら	1幅	尾道市東久保町	昭62.3.30		縦128cm、横128cm	鎌倉時代の作で、もとの軸木の銘によると寛元元年(1243)作、正應2年(1333)修理と伝えられる。 阿弥陀三尊を中心に多数の仏たちが集まる浄土の情景を描いたもので、当麻曼荼羅と呼ばれる形態の図の一つである。左右および下端にはイダイケ夫人が阿弥陀如来に帰依する物語や十六観想図などが描かれている。 細面が横に三幅に縦にあり、普通は縦横であるとは異なる。このような横縦または幅広の画面の場合に見られる。また、画面右端の上縁辺の風景描写が日本的な図になっており、中央の阿弥陀三尊は、仏身は金泥で、衣文は切金を用いられている。 廿日市潮音寺蔵の浄土曼荼羅(当麻曼荼羅形式)に次ぐ鎌倉時代末期の、本県には少ない遺例と言える。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色仁王経曼荼羅	けんぽんちやくしよくにおうきよまんだら	1張	尾道市東久保町	昭62.3.30	絹本着色、軸装	縦161cm、横128.5cm	鎌倉時代中期(13世紀)の作。方形の三区画に分けられ、中央に不動明王、周囲に四大天王や四天王などを描いている。 仁王経曼荼羅とは、国家人民の安穏を目的とする「仁王経法」という修法の本尊である。息災、増益、敬愛、調伏(ちゆうふく)など四種の修法を行きに懸けられていた。 この図は息災法用で、山口県神上寺に伝わる図の原本を写したと考えられている。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色釈迦八相図	けんぽんちやくしよくしゃかはっそうず	8幅	尾道市西土堂町	平8.3.18	絹本着色、三幅一鋪、第一幅「託胎」、第二幅「降誕」、第三幅「試衣」、第四幅「出家」、第五幅「半度文」、第六幅「降魔」、第七幅「転法輪」、第八幅「涅槃」	第一幅／縦114.0cm、横119.5cm 第二幅／縦112.1cm、横120.1cm 第三幅／縦111.8cm、横119.4cm 第四幅／縦113.6cm、横119.0cm 第五幅／縦113.5cm、横120.4cm 第六幅／縦112.6cm、横119.1cm 第七幅／縦113.1cm、横119.4cm 第八幅／縦112.2cm、横119.9cm	持光寺の八相図には、第一幅から順に「託胎(たくたい)」「降誕(こうたん)」「試衣(しせい)」「出家(しゅつげ)」「半度文(うごんじ)」「降魔(こうま)」「転法輪(てんぽりふん)」「涅槃(ねはん)」の場面が描かれており、各幅に数字順ずつ、30余りの事項が描かれている。 この八相図は、微妙な暈(ぼ)かしによって立体感を表し、繊細な色使いが施され、わが国中世の絵画(大和絵)に特有の無い所から見下ろす空間法を用いられている。わが国に残る大画面形式の釈迦八相図は、これを含めて6例しかなく、中世に描かれた八相図八幅本の中で、完存している唯一の事例である。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色伝足利尊氏像	けんぽんちやくしよくてんあしかがたかうじぞう	1幅	尾道市東久保町	平28.3.28	絹本着色、一幅一鋪、軸装	縦107.0cm、横56.7cm	画面中央部に、東帯姿で高麗冠(こうらいべり)の上げ髪に坐す人物像を描く。人物の容顔は程やかな印象に整えられており、その描写には似絵的な特徴が見られる。着している袍(ほう)には足利將軍家も家紋に用いた五七桐(ごしちのきり)が一面に散らされている。 本画像は、足利興氏と深い関係があった浄土寺に尊氏像として伝来した肖像画である。画装や花押、幸納文書などはなく、像主は未詳であるが、足利將軍家との関わりがかがやける図柄など高い技量を身に著けた中央絵師の手による制作と見られる出来映は、広島県内の中世に遺る数少ない武人肖像画の中でも大変貴重である。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色仏涅槃図	けんぽんちやくしよくぶつねはんず	1幅	尾道市西土堂町	平28.10.27	絹本着色、六幅一鋪、軸装	本紙縦202.9m、横154.3cm	仏涅槃図は釈迦の臨終の景観を描く仏画である。持光寺に伝わるこの涅槃図は、沙羅(さら)双樹(そうじゆ)の下、宝(ほう)台(だい)の上に横たわる釈迦を中心に、それを取り巻く衆(しゆ)衆(しゆ)や動物が卓越した筆致・画技によって描かれている。 本図は、旧裏打ち紙の銘文により、弘安7年(1284)に面師(えし)法橋(ほつきょう)若狭(わかさ)によって描かれ、江戸時代中期まで3度の修理が行われたと伝わる。後補箇所が多いものの、本図の主要部である釈迦と周囲の衆の表現はほぼ制作当初の状態をとどめている。 制作年代が鎌倉時代に遡る涅槃図の遺例が少ない中で、本図は制作優秀であるとともに、度重なる修理を経ながら大切に使用され、受け継がれてきた歴史的価値を有することから、貴重である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造文殊菩薩座像	もくぞうもんじゆぼさつざぞう	1躯	尾道市東久保町	昭29.9.29	寄木造、彩色	像高63cm	背に頭光身光を負い、右手に宝剣、左手に経巻を持ち、獅子の背上の蓮華座に半跏(はんか)坐している。金鈴をまとい眼光闊々たる獅子は、文殊菩薩に比べて大ぶりに造られ、南北朝時代(1333-1392)の作とされる。なお、本像を納める厨子の床板に、南部津波屋(つばい、橋井)仏所で造像され、永和4年(1378)7月4日に安置された旨の墨書銘が見られる。		
県	重要文化財(彫刻)	木造阿弥陀如来坐像	もくぞうあみだにょらいざぞう	1躯	尾道市東久保町	昭37.7.20	寄木造、漆箔	像高88cm、腰張72cm	浄土寺阿弥陀堂の本尊で、紙本墨書定証(じょうじょう)起請文(きしょうもん)(重要文化財)に記されている像と推定され、臨持の観音・普賢・勢至(せいし)菩薩とともに内陣に安置されている。 香炉では定朝作と伝えるが、定朝様を忠実に踏襲した仏師による平安時代末期(12世紀)の作と考えられる。		関連施設: 浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
県	重要文化財(彫刻)	木造仏殿棟厨子	もくぞうぶつでんようずし	1基	尾道市向島町	昭46.4.30	桁行26cm、梁間17cm、棟高(基礎とも)73cm、木造漆塗		本品は、工芸品であるとともに、和様を一部に交えた禅宗様の室町時代(1333-1572)の仏殿建築を彷彿とさせており、多少の欠損と塗りの剥離はあるが、小さな作品であるにもかかわらず、細部に究巧な時代の特徴を示しており、この種のものとしては珍しい秀逸な作品である。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(彫刻)	木造地藏菩薩坐像	もくぞうじざうぼさつぞう	1躯	尾道市御調町今田	昭50.9.19	寄木造、白形二重蓮座	像高41cm、膝張34cm、光背の径29.1cm、台座の高さ23cm	円頂で眉間に白毫をあらわし、半眼に開いた眼は木彫で、首には三連がある。連肩(つうけん)にかけた法衣及び身肌は金で、衣には唐草や定数を描き、その彫法は写実的で洗練である。胸には透彫(すかしぼり)金具の装飾をかけている。右掌には当初の攝持(しゃくじょう)をもち、左掌には宝珠を握っていたと思われるが今は欠失している。台座、光背(こうはい)ともに当初のもので、室町時代(1333～1572)の作である。 ※白毫(びやくこう)…仏の姿を表す三十二面相の一つで仏の眉間にあって光明を放つとされる。 ※環珞(ようらく)…珠玉をつづった首飾り		
県	重要文化財(彫刻)	木造持国天立像	もくぞうじこくてんりゅうぞう	1躯	尾道市御調町下山田	昭50.9.19	寄木造(頭部・胴体は一木形成)	高さ40.5cm	寄木造ではあるが、頭部と胴体は一木形成にした小像である。髪を着け右手を肩の上まで上げて鉢(ぼくご)を持ち、左手は腰に掛けている。肩裂(かたまれ)及び帯布を折げ、腰の両側から膝(ひざ)を垂らし、顔も彩色されていたと思われるが、今はほとんど剥落している。衣文の彫りは深く立体感に富んだ秀作で、顔部に前置(まえいで)を施し、頭髪を兼ねて五眼をほめ、口を強く結んだ気力にあふれる相の像である。室町時代(1333～1572)の作。		
県	重要文化財(彫刻)	木造一鎖上人坐像	もくぞういちしんしょうにんざう	1躯	尾道市東久保町	昭54.11.2	寄木造、乾漆、玉眼	像高90cm、膝張82cm	時宗の寺院である西郷寺の開基と伝えられる六代遊行(ゆきよう)上人一鎖の坐像である。この像は非常に写実味豊かで、頭部・顔面の筋骨や肉付きは巧みに表現されており、顔面・両手の皮膚色・唇の朱色等の彩色にすぐれている。像の仕上げは、木彫の上に麻布を貼り漆を塗布する方法を一度くり返し、像全体に穏やかさを漂わせる工夫がなされており、作者は不詳ながら、その確かな技術がうかがえる。南北朝時代(1333～1392)の作。		
県	重要文化財(彫刻)	金銅阿弥如来及び両脇侍立像	こんどうあみだにょらいゆびりょうきょうじりゅうぞう	3躯	尾道市東土堂町	昭55.6.24		中尊阿弥如来立像/全長57cm、宝身48cm、台座9cm 脇侍觀世音菩薩立像/全長39cm、宝身31cm、台座7.5cm 脇侍勢至菩薩立像/全長38cm、宝身31cm、台座7cm	鎌倉時代(1192～1332)以降、全国的にその造立信仰が流行した、信濃国長野の善光寺(ぜんこうじ)の本尊を模したと称せられている「善光寺如来」の一作例である。本来あったはずの一光三尊の板光背(いたこうはい)を欠失しているのは惜しいが、室町時代(1333～1572)のすべた造品である。中尊の両手とも刀印であるはずとさぶらふ珍しい、東日本に多く西日本に比較的少ないと従来いわれてきた善光寺如来像の分布に、新しい一例を加えるものである。 光明寺10代住職融印が、文明元年(1469)善光寺本尊を写した本尊を、大永2年(1522)同じく融印が開創した塔頭南之坊に安置したものとす。		
県	重要文化財(彫刻)	木造大日如来坐像 金剛界 附台座	もくぞうだいにちによらいざう こんこうがい つけたり だいざ	1躯	尾道市東久保町	昭62.12.21	寄木造	像高78.5cm、膝張60.0cm、台座高43.0cm	いわゆる智尊(ちきん)印を結ぶ結跏趺坐(けっかふざ)の金剛界大日如来である。本像は寺伝によれば、別件胎藏界大日如来坐像(県重要文化財)とともに浄土寺末寺の極楽寺の本尊であったと伝えられている。面部の彫り口は穏和で、また着衣の衣文の彫り口も淡く、像底からも内割(うちわり)が施されており、内割りは大きいほど平安時代(794～1191)の特徴がよく出ている。		関連施設: 浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
県	重要文化財(彫刻)	木造大日如来坐像 胎藏界 附光背	もくぞうだいにちによらいざう たいぞうかい つけたり こうはい	1躯	尾道市東久保町	昭62.12.21	寄木造、舟形板光背	像高90.0cm、膝張68.0cm、台座高118.0cm	法界定印(ほうがいじょういん)を結ぶ結跏趺坐(けっかふざ)の胎藏界大日如来である。檜材寄木造である。頭頂には余り高くない宝髻(ほうけつ)があるが、これは別造りで地髪部に短(は)ぎ合わす。金剛界の像とは彫法や製作技法も異なり、別人の作と思われるが、胎・金二界の大日如来が造存することは珍しく、平安時代(794～1191)の作ということもあって重要な作例と考えられる。		関連施設: 浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
県	重要文化財(彫刻)	木造千手観音立像	もくぞうせんじゅあんのりゅうぞう	1躯	尾道市東久保町	平3.12.12	寄木造、玉眼、金泥彩漆箔	像高139.0cm、裾張34.0cm	頭頂から足下、脇手、環珞金具、表面彩色等、細部まですべて当初のま非壊っており、その保存状態はきわめて良好である。作風は、細部まで非常に丁寧な作りで、優れた技術をもった仏師の作と思われる。光背(こうはい)、台座も同時代のものと思われる貴重な仏像である。鎌倉時代中期(13世紀中頃)の作である。 ※環珞(ようらく)…珠玉をつづった首飾り		
県	重要文化財(彫刻)	木造真教上人坐像	もくぞうしんきょうしょうにんざう	1躯	尾道市西久保町	平3.12.12	寄木造、玉眼、彩色	像高82.0cm、肩張48.0cm、膝張74.0cm、面長18.0cm、面幅16.0cm	時宗の開祖一誓上人の高弟「真教」の僧形坐像である。法衣は白衣の上に墨染めの衣を着し、袈裟を懸けた姿を写実的に彫り出している。「一誓」の死後、教団として実質的に組織化した真教上人の数少ない彫像であり、貴重なものである。 製作年代は鎌倉時代後期または南北朝時代(14世紀)と推定される。		
県	重要文化財(彫刻)	木造阿弥如来立像	もくぞうあみだにょらいりゅうぞう	1躯	尾道市西久保町	平28.10.27	檜材、寄木造、差し首、玉眼嵌入、白毫水晶(新補)嵌入、肉髻珠(後補)嵌入、着衣全体に鍍金・盛り上げ彩色	像高130.9cm	常務寺本堂本尊である本像は、頭飾部の(ハンス)がよく整えられているとともに、流麗な衣文(えもん)が的確に彫成され、着衣全体には精緻な文様が敷(き)きり(か)や盛り上げ彩色による高度な技術で表現されており、これらは当初の状態ではほぼ完全に残っている。 本像は、平成24年度の保存修理の際、足柄(あしほ)の銘文から、正中2年(1325)に仏師美作(みまさか)法橋(ほつきょう)宗鑑(そうかん)(又は「宗誓(そうせい)」)により約3か月間の期間で制作されたこと、50人以上の仏名の寄進者などが確認された。 本像は、数少ない時宗(じしゅう)寺院所遺構にある本堂本尊として、製作年代などが分かることに加えて、制作優秀であり、特に着衣全体の精緻な装飾が当初の状態ではほぼ完全に残っている点例がほとんどないことから、貴重なものである。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(彫刻)	木造五劫思惟阿弥陀如来坐像	もくごうごういあいだにょらいざぞう	1躯	尾道市西土堂町	平28.10.27	檜材か、寄木造、玉眼嵌入、白毫水晶嵌入、肉髻珠(後補)貼付	像高:112.0cm	五劫思惟阿弥陀如来像は、五劫という長い時間思惟にふけり、理髪をしなかつたために長大な頭髪となったことを表す大きな膨らんだ頭部が特徴である。持光寺本堂本尊である本像は、風箱のある巻物の「ワラス、ぶよかであるが目鼻立ちのすっきりとした面部の表現、整えられた衣文表現などに優れた造形感覚が認められる。当寺の古記録によると、本像は元禄15年(1702)に仏師(ぶつし)法橋(ほつきょう)安(あん)清(せい)により造像されたことが記されている。江戸時代以前の木造彫像の五劫思惟阿弥陀如来像は全国的にほとんど遺例がない中で、本像は彫技が的確であり、造形的に優れただけでなく、制作年代や作者などの由緒が分かるものとして、貴重である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造阿弥陀如来及び両脇侍立像 附 観音菩薩像内納入品 阿弥陀如来印仏 十五枚 勢至菩薩像内納入品 阿弥陀如来印仏、包紙添 十一枚 内一枚に弘安八年二月の記がある 阿弥陀如来像内納入品(追納) 一、台座光背寄進状 包紙添 一通 一、位牌 一柱	もくごうあみたにょらいわよりょうきょうじりゅうぞう	3躯	尾道市東久保町	令和元年(2019)10月21日	檜材、寄木造、金泥塗り、鍍金、玉眼嵌入	阿弥陀如来立像(中尊) 像高:98.9cm 髮際高:91.8cm 観音菩薩立像(左脇侍) 像高:66.3cm 髮際高:55.8cm 勢至菩薩立像(右脇侍) 像高:66.4cm 髮際高:55.7cm	本三尊像は、時宗寺院・西郷寺の本堂本尊で、阿弥陀如来像を中尊として、前傾の観音菩薩像と勢至(せいし)菩薩像を脇侍とする。来迎形の阿弥陀三尊像である。檜材、寄木造。阿弥陀如来像は、ぶよやかな顔貌、矩形(けいけい)のしした体軀に緩やかな式文様が施され、立体的で端正な造形を持つ。両脇侍像は、程の高い軀身の優容で、随所に細かな部材を組み合わせて軽妙な姿態が読み出され、絵画的な律動感がある。いずれも仏師の優れた造形感覚と高い技術を読み取ることができる。平成25-26年の保存修理の際、両脇侍像の像内から印仏が発見され、その中に弘安8年(1285)の年紀が確認された。納入品は造像当初のものと考えられ、本三尊像は同年に制作されたと考えられるに至った。以上より、本三尊像は、制作優秀であるとともに、年代の明らかな来迎形阿弥陀三尊像の基準作に位置付けられるため、本県の彫刻史上特に重要な作品であると評価できる。また、印仏を始めとする納入品も、本三尊像の由緒・伝来を示す重要な資料である。		
県	重要文化財(工芸品)	銅製髷口	どうせいわにくち	1口	尾道市東久保町	昭29.9.29	銅製	直径37cm、重量15kg	髷口は、経鼓(しょうこ)を二つ合せた形に似て、神社仏閣の軒先に懸けてあり、前面に経(かね)の緒という布縷を垂らし、参詣人はこの緒を手に持ち、垂て顔面を打ち礼拝するもので、本品も浄土寺本堂(国宝)の正面に懸けられている。刻銘があり、貞和5年(1349)の作であることが分かる。「備後国尾道浦浄土寺観音堂也」貞和五年己丑卯月十八日大工阿部房綱		関連施設: 浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
県	重要文化財(工芸品)	金銅蓮花輪宝文置説相箱	こんどうれんげわんぼうもんおきせつそうばこ	1合	尾道市東土堂町	昭36.4.18		縦39cm、横36cm、高さ12cm	長方形の箱で、導師が説教の原稿などを入れる。木製扉蓋裏で箱面に金銅の蓮華(れんげ)文や輪宝(りんぼう)文などの金具を置き、ふちに唐草文を浮彫りにした帯板(おび)を貼り、上げ底の脚部は金銅板(くわん)を施した格狭間(こうざま)を透かす。製作の年時は「慶長第三成成(朱漆書之銘)」すなわち慶長3年(1598)で、手法と様式は安土桃山時代(1573~1602)の特徴を示している。		
県	重要文化財(工芸品)	白紫緋糸段威巻附 兜肩庇	しろむらさきいとだんおどしはらまき	1領	尾道市因島中庄町宇寺迫金蓮寺内	昭36.11.1		高さ53cm、胴回972cm	腹巻は、背中引合せ形式の初期のものは袖も兜もない軽武装用の纏で、鎌倉時代末頃(14世紀前半)発生したと思われる。その後、室町時代(1333~1572)には大流行し、背中の引き合わせ部分に背板をつけ、更に袖をつけ兜も具備するようになる。本品はそのような室町時代末期の腹巻と思われる。小札を紫・緋・白糸で段々に威(おど)した、美しく軽快な姿の腹巻である。伝承によると因島村上家九代の新蔵人吉充が、小早川隆景より拝領したと言い、村上家に代々伝えられたものである。		
県	重要文化財(工芸品)	鉄製燈籠	てっせいとうろう	2基	尾道市東久保町	昭37.7.20	鑄鉄製の屋蓋や柱を組み合わせたもの。	高さ37cm、幅28.5cm	もと浄土寺利生塔(りしやうとう)にあったと伝えられる一対の燈籠。春日厨子の形をとる。鑄鉄製の屋蓋や柱を組み合わせたもので、軒ぞりを美しくするため、かや良いの中央に折れを作るなど、時代の建築の作風をよく反映する。屋根の上には三鉢(さんご)のすかしを二つ並べるが、ひわりこ連子(れんじ)に菱形をきざんだ欄間、きびきびしたくり形の格狭間(こうざま)などは南北朝時代初期(14世紀前半)ころの様式をよく示している。		関連施設: 浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
県	重要文化財(工芸品)	木造厨子 木造厨子台(旧太子堂安置) 1基	もくごうずし もくごうずしだい	3基	尾道市東久保町	昭37.7.20	春日厨子 大(高さ1.6m)中(高さ1.3m)、小(残欠) 厨子台 幅2.7m、奥行1.28m、高さ32cm		3基の厨子は春日厨子で、それぞれ聖徳太子像(重要文化財)を納めていたものである。厨子の台は、重ね菱の文様を連子の中きざみ出した手法は多宝塔須弥壇のそれと同じで、厨子とともに南北朝時代(1333~1392)ころの作と推定される。台及び厨子とともに簡素なすっきりした秀作である。		関連施設: 浄土寺宝物館 (0848-37-2362)
県	重要文化財(工芸品)	太鼓	たいこ	1張	尾道市東久保町	昭41.4.28	皮に墨で雲龍と鳳凰が描かれ、紙とめ	径96cm、高さ88cm、胴回り301.5cm	胴内銘によると、正和5年(1316)に大工教通・女孫により制作されたもので、皮に墨で雲龍と鳳凰がかかれており、紙留(びよとめ)である。また、皮の張り替えは、延元元年(1336)・延文4年(1359)・応永6年(1399)・応永34年(1427)・元和4年(1618)の5回あり、何年でも張り替えられたことがわかり、歴史的資料としては珍しい。		関連施設: 浄土寺宝物館 (0848-37-2362)
県	重要文化財(工芸品)	銅製地藏菩薩懸仏	どうせいじぞうぼさつかけぼとけ	1面	尾道市瀬戸田町御寺	昭62.3.30	浮彫、半肉彫、毛彫	径24.2cm	鎌倉時代(1192~1332)の作。円形銅板中央に宝珠と錫杖(しゃくじょう)をもつ地藏菩薩が蓮台上に坐し、頭光身光を負う姿に表されている。地藏と蓮台は、一枚の銅板を楕円で起して肉肉に押し出して現われ、衣文など細部は、よどみない流れるような彫彫(しゅうじょう)で表現し、頭光・身光とともに円形銅板上に砥止めされている。懸仏は仏像などを金属などの円板上に作り出したもので、神社や寺院の内陣に懸けられていた。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(工芸品)	銅鐘	どうしやう	1口	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平6.2.25	和鐘、撞座に蓮華文	総高93.5cm、口径59.5cm	戦国時代の天文24年(1555)製作の和鐘で、三原鑄物師の製作したものである。撞座(つきざ)には蓮華文を刻出している。 また、慶長の追銘には、豊臣秀吉の朝鮮侵略の時に供出されようとした本鐘が、町衆の寄附によって免れたことが別してあり、天文年間(1573～1591年)当時の和鐘様式を良く伝えているのみならず、向上寺自体の歴史を語る資料としても貴重である。 向上寺は臨済宗仏通寺の大通神師の開山になる寺で、瀬戸田水道北口に位置する。国宝三重塔があることでも著名である。		
県	重要文化財(工芸品)	金銅製有頭五輪塔形舍利塔	こんどうせいけいけいごりんどうがたしやりとう	1基	尾道市瀬戸田町御寺(福山市西町二丁目 広島県立歴史博物館寄託)	平8.9.30	銅造、鍍金	総高6.45cm、舍利容器高2.2cm	平安時代末期から鎌倉時代(12世紀後半～14世紀前半)にかけて製作された舍利容器である。通常の五輪塔と異なり、火輪と水輪の間に円筒状の部分で作られており、むしろ宝塔を意匠したデザインと言える。水輪部内部に舍利を納める円筒とその蓋がある。蓮華座など各所に細かな細工が施され、洗練された美しさを感じさせる。 光明坊は鎌倉時代以来の古刹であり、西大寺流律宗の影響が伝わる。		関連施設: 広島県立歴史博物館 (084-931-2513)
県	重要文化財(工芸品)	金銅火燭宝珠形舍利容器	こんどうえんぼうじゆがたしやりょうき	1基	尾道市東久保町	H26.2.27		総高 14.2cm 基壇径 5.6cm、独鉢弁(高さ)4.6cm、輪宝径 4.2cm(輪宝中央枘穴 縦横 0.4cm×0.5cm)、蓮華座径 4.4cm、宝珠(高)3.9cm(径)3.2cm 火燭最大幅 5.6cm	当該舍利容器は、下から、台座、輪宝(りんぼう)及び宝珠から成る。 台座は、六方隅入りの円形の基壇の上に反花座(かえりばなざ)が載り、その上に独鉢弁(とくぱつぺん)が立てられる。独鉢弁の上には輪宝と宝珠を連結するほぞとなる。 輪宝は、中央部に独鉢弁の先が入るよう四角い穴が設けられている。 輪宝は、蓮華座の上に載り、四方を火燭が囲んでいる。蓮華座は、5段で各段8弁の計40弁の蓮弁から成る。宝珠内部には、白色とやや黄色味を帯びた米粒状の舍利が納められている。いずれも水晶製と思われる。宝珠は水晶製で、これ以外は金銅製で鍍金が施されている。 広島県重要文化財「浄土寺文書」によると、暦応3(1340)年、足利尊氏の弟の直義(ただよし)が仏舍利2粒を浄土寺に奉納したことが知られる。当該舍利容器の制作時期は南北朝時代と思われる、これがこの仏舍利を収めた容器である可能性がある。		関連施設: 浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書西国寺寄附帳	しほんぼくしよさいてくしきふちやう	1帖	尾道市西久保町	昭30.1.31	紙本墨書、折本		南北朝時代末期から室町時代(14～16世紀)にかけて行われた西国寺の講堂宇の建立再建に関する寄附を中心とした記録したもの。巻頭の山名持堂(宗全、1404～1473)をはじめ山名氏一族や備後守護代・大崎高泰などの山名氏族官を中心とした名前の名目と寄進内容が記されている。「昭陽郡新庄長者実秀」の名も見える。中世の高裕層の一端を見ることもできる。 西国寺は今日までに幾度かの災禍に遭い、平安時代(794～1191)に白河法皇により再建、南北朝時代から室町時代にかけては、備後守護山名氏などの保護を受けた。		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書西国寺建立施主帳	しほんぼくしよさいてくしこんりゅうせしゅちやう	1帖	尾道市西久保町	昭30.1.31	紙本墨書、折本	縦33cm、横122.4cm(八折)	室町時代(1333～1572)の西国寺再建で施主となった人たちの署名帳である。巻頭の「征夷將軍」は花押から見て足利6代將軍義教(1394～1441)と考えられ、次いで本願導師である西国寺の釋尊(うしそん)僧正、次いで、細川持之、畠山持國、山名持堂、大内教弘など、幕府の重臣や守護大名たちの名が見える。 西国寺は今日までに幾度かの災禍に遭い、平安時代(794～1191)に白河法皇により再建、南北朝時代から室町時代にかけては、備後守護山名氏などの保護を受けた。		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書西国寺不断修繕行事及西国寺上銭帳	しほんぼくしよさいてくしふだんぎょうしゆきやうじおひよさいこじあけせんちやう	1帖	尾道市西久保町	昭30.1.31	紙本墨書、折本	縦30.3cm、横702cm(52折)	戦国時代の文明8年(1471)6月16日、西国寺の不断修繕行を再開するため、西国寺支配下の各坊に上銭をさせた記録である。この一帖に書き上げられた各坊僧侶の数は197家にのぼり、尾道をはじめ、吉舎・今高野山・御調などの備後国内の僧や備前中興王寺などの名が見える。 不断修繕行は天文元年(1108)堀川院追福のため始まったが、武家の領地押領のため中断していた。 西国寺は今日までに幾度かの災禍に遭い、平安時代(794～1191)に白河法皇により再建、南北朝時代から室町時代(14～16世紀)にかけては、備後守護山名氏などの保護を受けた。		
県	重要文化財(典籍)	版本大般若経附経櫃3櫃中箱60箱	はんぼんだいはんにゃきやう	600帖	尾道市西久保町	昭30.1.31	版本、折本	縦26.3cm、横10cm程度	近江源氏の佐々木氏輔が唐暦元年(1379)に開版した版本で摺った大般若経で、600帖を完備しているのは珍しい。経巻の奥書や経櫃の墨書銘により、応永9年(1402)6月に西国寺薬師堂(金堂)に施入されたことが記されている。 蓋裏墨書銘は次のとおりである。 「寄進備後国御調郡尾道浦西国寺薬師堂 応永九年壬午六月八日勅主権律師慶弁願主興賢」		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書大般若経附経櫃1櫃中箱16箱	しほんぼくしよだいはんにゃきやう	112帖	尾道市西則末町	昭30.1.31	紙本墨書、冊子、旋風葉(せんふうよう)		平安時代の承安5年(1175)に藤原盛時が三島大明神に施入した大般若経。全巻に施入の奥書がある。1行17文字で、界線は墨書である。旋風葉(せんふうよう)の表装を施したこの経巻は、全巻を同時期に書写したのではないようである。奈良・平安時代初期(8世紀前半)の書風も見える。 天文22年(1553)に粟原六村の氏子により八幡宮に寄進され、以来、粟原八幡神社に伝えられた。櫃の蓋裏に墨書で寄進した旨が記されている。 「天文廿二天美丑粟原之惣六村願主八幡宮御経五百内六百内住信潤正月十三日氏子諸人」		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書大般若経	しほんぼくしよだいはんにゃきやう	2帖	尾道市美ノ郷町本郷	昭30.1.31	紙本墨書、折本		平安時代の永久6年(1118)に明法生藤原季行が書写した旨を記している。巻第百五十三及び巻第百五十四の二帖が伝えられ、各巻に奥書がある。1行17文字、界線は墨書である。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書西国寺塔婆勸進帳	しほんぼくしよさいてくじょうばかんばんちよう	1巻	尾道市西久保町	昭31.3.30	紙本墨書、卷子装	縦42.0cm、横255cm	室町時代の永享元年(1429)に睿尊(ゆうそん)僧正が西国寺三重塔(重要文化財)の建立を発願した際、寄附を募るために趣旨を記した勸進帳である。西国寺は今日までに幾度かの災禍に遭い、平安時代(794～1191)に白河法皇により再建、南北朝時代から室町時代(14～16世紀)にかけては、備後守護山名氏などの保護を受けた。		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書因島村上家文書	しほんぼくしよたいんのしまむらかみけもんじよ	3巻	尾道市因島中庄町宇寺迫(水軍城資料館寄託)	昭37.3.29	紙本墨書、卷子装	第一巻長さ222.7cm、幅40.6cm、第二巻長さ746cm、幅40.6cm、第三巻長さ450cm、幅40.6cm	因島を中心とする中世荘園関係文書。感状及び書簡など50通からなる因島村上家伝来の古文書群。鎌倉時代から戦国時代(12世紀末～16世紀)の毛利・小早川関係のものまでであるが、すべてが因島村上家に関係するものではない。その関わりについて種々論議されているが、確たる説はない。いずれにしろ、中世における因島及び瀬戸内海地域の状況を知るうえで貴重な史料である。因島村上家といわれる三島村上家の一ツである。室町時代(1333～1572)以来因島や向島などを拠点に活動し、金蓮寺や中庄八幡宮など因島村上家ゆかりの社寺も数多く見られる。後、小早川氏の水軍の一翼を担った。		
県	重要文化財(典籍)	金蓮寺在銘瓦 宝徳三年結縁衆の名を記す	こんれんじざいめいかわら	4巻	尾道市因島中庄町宇寺迫 金蓮寺内	昭37.3.29	丸瓦・棟瓦、銘へら彫刻	丸瓦縦32cm、横14cm、高さ7.6cm 棟瓦縦30cm、横29cm	因島村上吉資が薬師堂を建立した翌年の宝徳2年(1450)に御堂の上草のこを銘書(へらがき)した丸瓦と棟瓦である。尾道の瓦大工が製作したもので、住持快秀(かいしゆ)、大壇那宮地大炊助妙光(おおいのすけみよこう)、瓦大工尾道住衛門五郎経次などとともに、浦々の結縁合力者の名が列記されている。宮地妙光は俗名明光、村上吉豊・吉資の家老であったという。また、伯耆大山の僧侶の名前も見られ、瀬戸内と日本海の交流の様子をかかうことができる。金蓮寺は、因島のほぼ中央にあり、因島村上家の菩提寺である。宝徳元年(1449)村上吉資が創建したと言いが、開基はそれ以前と思われる。		
県	重要文化財(典籍)	法華経版木	ほけきょうはんぎ	62枚	尾道市東久保町	昭38.11.4		縦65cm、横90cm	南北朝時代の応永2年(1395)9月から3年正月にかけて、僧行安の勸進により、浄土寺で開版された版木。広く俗人の理解をはかるため、経文に送り仮名や送り点を施しており(巻八の刊記)、付刷の版経の古い資料として貴重である。また、この版木は、応永5年(1398)重刊近江八幡神社蔵の極高法華経と本文刷点が大体同じであり、播磨書写山の心空の校定版の改刻版の一つと言われる。		関連施設: 浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
県	重要文化財(典籍)	梵網経版木	ぼんもうきょうはんぎ	6枚	尾道市東久保町	昭38.11.4		縦65cm、横90cm	室町時代の応永11年(1404)浄土寺で作られた版木。「備後国尾道浦於浄土寺開版応永十一年甲申」の刊記があり、地方における印刷文化発達の事例として貴重である。梵網経は5世紀後半に中国で成立したと推定されている経典。日本仏教でも尊重され、多くの注釈が作られた。		関連施設: 浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
県	重要文化財(典籍)	浄土寺文書	じょうどじもんじよ	104通	尾道市東久保町	昭41.4.28	紙本墨書		鎌倉時代末期から室町時代(14～16世紀)にかけての文書類である。浄土寺が、天皇家をはじめ足利将軍家・管領・守護・守護代などと密接な関係を保ちながらその信仰を集めるとともに、寺領荘園の維持に努めてきたその時代推移を語る資料類である。これを大別すると1. 信仰関係、2. 皇室・足利氏以下諸豪族から荘園までを網羅した文書、3. 寺領年貢書付となり、それらは相互にからみあっている。寺内にあった利生塔の料所種田村(双三郎君田村)の百姓等が、武家代官に対する年貢拒否を申し合わせた連署起請文のような、庶民の動きを示す文書も含まれている。		関連施設: 浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
県	重要文化財(典籍)	紺紙金銀泥大乗十法経	こんしきんぎんでいだいじょうじっぽうききょう	1巻	尾道市瀬戸田町御寺	昭46.4.30	卷子本	全長1,012cm、幅25.7cm	紺紙十八紙を縫いで作られた経巻で、巻頭表には金泥をもって宝相華(ほうそうけ)摩草文様を題巻を描いて「大乗十法経一巻」の経題を書いている。見返しには、釈迦が宝樹の下で大衆説法をしている図を描写した表紙をつけている。本文は「仏教大乗十法経」から書き始め、金銀泥で全奉行の間に金銀一行ずつ交互に書き写す交書で記され、流麗な楷書で書かれた装飾経で、奥書はないが平安時代(794～1191)の作である。		
県	重要文化財(典籍)	紺紙金銀泥無量義経	こんしきんぎんでいむりょうぎきょう	1巻	尾道市瀬戸田町御寺	昭46.4.30	卷子本	全長846cm、幅25.6cm	紺紙十七紙を縫いだ経巻で、巻頭に見返し経があったと思われるが、ほとんど欠失してその残部をわずかに残すのみである。巻末には杉製の軸棒をつけ、その両端の金銀[84a3]形(ばらがた)金具は完存しており、魚々子(ななこ)で宝相華(ほうそうけ)文様を彫り出し、当時の工芸技術を知るうえで資料となる。本文は、金銀泥で全奉行間に金銀一行ずつ交互に流麗な楷書で書き写したいわゆる交書で、奥書はないが平安時代(794～1191)の装飾経である。		
県	重要文化財(典籍)	紺紙金泥大田比盧遮那成仏経巻第三	こんしきんでいだいびるしやなじょうぶつきょう かんだいきん	1巻	尾道市瀬戸田町御寺	昭46.4.30	卷子本	全長802cm、幅25.8cm	紺紙十六紙を縫いでおり、紺紙の表には金泥で宝相華(ほうそうけ)文と「大[84a4]盧遮那成仏経巻第三」の経題を書き、見返しには山水、雲雁、蓮池を描き、屋内には二人の僧が対面し、外には数人の僧がいる様子が描かれている。杉製の軸の両端には金銀[84a3]形(ばらがた)金具をはめ、魚々子(ななこ)で宝相華文様を彫っている。本文は「大[84a4]盧遮那成仏神変加持持経世間成就品第五」から書き始め、銀筆の間に金泥で楷書で書き写した装飾経である。奥書はないが平安時代末期(12世紀後半)の作。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(典籍)	紺紙金泥大田比盧遮那成仏経巻第五	こんしきんでいだいびるしゃなじょうぶつぎょう かんだいせん	1巻	尾道市瀬戸田町御寺	昭46.4.30	巻子本	全長900cm、幅26cm	紺紙十七巻を纏いだ経巻で、紺紙の表には金泥(きんでい)で宝相華(ほうそうげ)文様を描き、題面に「大[84f]盧遮那成仏経巻第五」の経題を書き、見返しには智度山での釈迦説法の図を描いている。軸木は杉製で、両端に金銅掬形(こんごうくちがた)金具に魚や子(なご)で宝相華文様を彫り出ししたものをつけている。本文は「大[84f]盧遮那成仏神変加持経巻第五、字輪点第十から書き始め、銀葉の間に金泥をもって楷書で記した裝飾経で、奥書はないが、鎌倉時代初期(13世紀前半)の作。		
県	重要文化財(考古資料)	貝ヶ原遺跡出土の特殊器台形土器	かいがはらいせきしゅつどのとくしゅきだいがたどき	1点	尾道市御調町市 御調町教育委員会	昭62.12.21		現高68.5cm、脚部最大径41.1cm、胴部最大径23cm	この特殊器台形土器は、昭和43年(1968)御調町貝ヶ原に位置する御調川沿いの左岸丘陵の土取り工事中に出土したといわれる。特殊器台形土器は、特殊蓋形土器とともに、弥生時代後期の中環(2世紀末)以降に、吉備(岡山県・広島県東部)を中心とした境域から出土する。集落遺跡から出土する日常使用される器や壺に比べて、極めて大型化すること、縮蓋文(きしもん)・斜格子文(しゃこうしもん)、連続S字状の文様などの特徴ある文様で飾られること、赤色顔料が表面全体に塗られることなど、大きく相違し、墳墓の葬送に関する土器と考えられている。本例は特殊器台形土器の中では古式の様相を示すものであるとともに、吉備の中環(岡山県南部)においてもこのような完存に近いものはなく、極めて貴重な資料の一つといえる。		
県	史跡	太田貝塚	おおたかいつか		尾道市高須町字出口、同字竹之端	昭24.8.12 昭48.12.18(一部解除)	縄文時代前期～後期(約6000～3000年前)		松永湾西部の標高約3mの微高地に位置し、かつては直接海浜に接していた縄文時代(約12,000～2,300年前)の貝塚である。古くから多数の土器を出土して著名であるが、その所属時期はたしかでない。縄文時代の遺物としては、前期、中期、後期の土器があり、前期土器は貝層下の有機砂層に包含される。土器のほか多量の石鏃(せきぞく)、石匙(せきし)、石鏝(せきすい)やハイガイ・アカギ・アラギなどの貝類、獣骨などが出土し、狩猟、漁撈の生活を物語る。なお昭和39年(1964)の調査では、遺跡の東半部に幅25m、深30.95mの溝状遺構が南北にわたって検出され、多量の古式土器や装璜土器が出土した。現在、貝塚の一部は史跡公園として活用されている。		
県	史跡	因島村上氏の城跡 長崎城跡 青木城跡 青陰城跡	いんのしまむらかみしのしろあと(ながさきしょうあと、あおきしょうあと、あおかげしょうあと)		尾道市因島土生町 尾道市因島重井町 尾道市因島中庄町・田熊町	昭32.9.30			中世瀬戸内海中央に勢威をふるった因島村上氏の主要な城跡群である。因島の南端にある長崎城跡は、村上氏の隠蓑(ひづらなだ)方面に対するもので最初の拠点と考えられるが、現在、日立造船敷地内にあり、遺構はほとんど失われている。島の北端にある青木城跡は向島の奈崎城と共(布刈(ぬかり)瀬戸を見張る城として利用され、標高50mの本丸を中心に東の大手に向かって郭が連なる。なお、城跡には的場・裏木戸の地名を伝える。島の中央の青陰城跡は、標高275mの山頂に位置し各要衝を指揮する拠点になっていたと思われる。三の丸を西端に、東へ郭が並んだ城跡である。城跡には大手・裏木戸・陣屋・水落などの地名を伝える。		関連施設:水軍城資料館(0845-24-0936)
県	史跡	鷲尾山城跡	わしおやまじょうあと		尾道市木之庄町木梨	昭52.3.4			建武3年(1336)、足利尊氏に従い九州多々良浜(たたらはま)(博多)の戦いで戦功をたてた備後の豪族杉原信平・為平兄弟が木梨(13)村を領知し、翌年木梨山に鷲尾山城を築いて以来250年間、木梨杉原氏の本城として盛衰をきた山城の跡と伝えられる。東側の木梨川および西側の谷川を天然の堀とし、標高320mの険しい山を利用したこの山城はよく保存されており、面積880mの本丸をはじめ二の丸・土塁跡・帯曲輪・出丸(馬場跡)および南側に4段と北西側に8段の曲輪が残っている。		
県	天然記念物	御寺のイブキヤクシン	みてらのいぶきやくしん		尾道市瀬戸田町御寺字西郷	昭24.10.28			イブキヤクシンは針葉高木で、日本では主として青森県以南の太平洋沿岸地域に自生するが、多くは庭園木として栽培されている。本樹は県内有数のイブキヤクシンの巨樹である。樹高は7.6mで、主幹は地ぎわで東西の二大支幹にわかれ曲折しており、植物形態学上からみても価値の高いものである。なお、イブキヤクシンは、ビヤクシンの別名である。		
県	天然記念物	山波良神社のウバメガシ	さんばうしらじんじやうばめがし		尾道市山波町	昭34.7.15			ウバメガシは、我が国南西部の海岸地帯と中国大陸の南東部に隔離分布する常緑のカシである。本樹は、地上約1.5mで大小数多くの支幹に分かれ、さらに南方にやや離れて三支幹が地面から出ているので、現状では一樹葉の観を呈するが、本葉、枝への樹木であると考えられる。全国有数の巨樹である。本樹は指定時、海岸近くに位置していたが、その後、生育環境の悪化により北方300mの尾道造船(株)構内へ移植された。		
県	天然記念物	垂水天満宮のウバメガシ群落	たるみてんまんぐうのうばめがしぐんらく		尾道市瀬戸田町垂水	昭53.10.4			本群落は、生口島西側の龍甲山(海拔約30m)内にある天満神社(垂水天満宮)参道の両側、南東及び南西斜面に発達している。樹高5～15mのアカマツが散生するが、ウバメガシが優占し、ほとんど純林の感がある。本群落は、群落の規模としてそれを凌駕し県内有数のものである。地上50cmの幹囲が1mを超える大木も見られ、本地方の海岸急傾斜岩地に特有なウバメガシ天然林の面影を留めるものとして貴重な存在である。		
県	天然記念物	阿弥陀寺のビヤクシン	あみだじのびやくしん		尾道市向島町岩子島	昭53.10.4			本樹は、樹高約16m胸高幹囲2.7mで、植栽されたものと思われるが、すでに県指定となっているビヤクシンに比べて、直立性で、豊かに発達した枝葉が大きな広卵形の樹冠を形成し、樹勢も極めて旺盛である。かなりの巨樹である上、本種の生育形の一つを代表するものとして植物学的に価値が高い。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	天然記念物	仁野のナナメキ	にのななめのき		尾道市御調町仁野字岡田沖	昭59.1.23			ナナメキ(別名ナナメノキ)は関東地方以西の近畿、中国、四国及び九州の諸地方に生育し、中国にも分布するモチノキ科の常緑広葉高木である。南向きの緩斜面の畑地帯の中腹にある仁野谷観音堂の境内にあり、樹高約17m、胸高幹囲2.64mを測り、県内最大級の規模である。		
県	天然記念物	良神社のクスノキ群	うしとらじんじゃのくすのみきん		尾道市長江1丁目	昭63.12.26			良神社は平光寺山麓、海拔12～20mに位置している。境内には、拝殿の東方に1株(1)、社殿南側の階段状に並んだ台地の1、2、4段にそれぞれ1株計3株(2、3、4)、合計4株のクスノキが大きな樹冠を広げている。それぞれ樹木の状況は次のようである。 (1)…神社の入口を入ってすぐ右側。拝殿の東前方に位置する最も大きい株である。主幹は地上2.7～3.2mの所で、太さの違つ支幹に分かれる。樹皮上にはコケ類が多数着生している。 (2)…南側階段台地の第1段、社殿寄りにある巨岩の横に生じ、樹幹がやや東に傾いている。 (3)…第2段にあり、樹幹はほぼ直立する。 (4)…最上段の北寄りにあり、(3)の株とほとんど同じ大きさである。		
県	天然記念物	鏡浦の花崗岩質岩脈	かがみうらのかこうがんしつがんみやく		尾道市因島鏡浦町字小鏡	平17.4.18			鏡浦集落の北東端にある岬の突端から南に続く東海岸に見られる地質現象である。黒色の泥質岩(でいしつがん)類を主体とする堆積岩類中に、優白質の花崗岩質岩脈が、南北方向にほぼ水平に貫入している。岩脈の主脈部分は、北端では約2mの幅であるが、多少の膨縮を繰り返しながら、南に約120mにわたって連続している。主脈から分岐した支脈は幅数cmの細脈となっている。露頭の北端から約60m南では、淡緑色のランプロファイヤー岩脈が堆積岩類と花崗岩質岩脈を約1m幅で垂直に切つて貫入している。以上のような岩類から構成されるこの露頭は、広島県南部の地質現象を代表する典型的なものである。干潮時には、海岸に沿って連続する露頭を詳細に観察することができ。 (注1)「花崗岩」とは、石英・長石を主成分とする岩石で、ごま塩状に黒雲母が散在し、全体としては白みがかったものが一般的。通称は御影石と言ひ、建築材や墓石などの石材として多用される。 (注2)「岩脈」とは、マグマが他の岩石の割れ目に貫入して凝固し、脈状につながっているもの。この露頭の花崗岩質岩脈は、約9000万年～8000万年前の中生代白堊期後期に形成された。 (注3)「泥質岩」とは、岩石や鉱物のかけらが泥・粘土などの粘りとなり、堆積して固まって岩になったもの。この露頭の泥質岩類からなる堆積岩類は、中生代ジュラ紀(約2億3000万年前～約1億3500万年前)に形成された。 (注4)「ランプロファイヤー」は、輝石・角閃石・黒雲母などの有色鉱物の割合が多い、濃色斑状の半深成岩。		
県	無形民俗文化財	太鼓おどり	たいこおどり		尾道市吉和町	昭40.10.29			隔年の旧7月18日に行うおどりで、吉和から出発して浄土寺にいたり、本堂前でおどる。浄土寺との関係はたまたま病魔退散のため、感謝奉納したのが因縁となったものであろう。百数十名の大行列で、大幸領以下、太鼓方、小太鼓方、鉦(かね)方、その他御船方、船唄、狂言の各役に分かれているが、太鼓と小太鼓が中心となるためこの名がある。勇壮活発なおどりであるため、足利尊氏(あしかがたかうじ)の水軍に加わつて戦功があった吉和の漁民が、戦勝祝いとおどつたと伝えられているが、確証はない。恐らく元来は念仏おどりであろう。享保9年(1716)の記事や嘉永9年(1850)の古図によってその歴史の古いことが分かる。		
県	無形民俗文化財	みあがりおどり	みあがりおどり		尾道市御調町	昭41.4.28			豊年の予測される旧暦7月17日に、高御調八幡神社に奉納されるおどりで、大太鼓と鉦(かね)のはやしにあわせて踊る。この踊りは古くは「高御調八幡奉納おどり」と言われており、「みあがり」の語源は足利尊氏と結びつけた「都あがり」より、むしろ氏神への語りを奉納するための「宮あがり」と思われ、古くは御調川沿いの各集落に伝えられ、農民の生活に密着したおどりである。おどり方、衣裳、はやし方などから見て、豊年おどり、雨乞おどりなどの二・三の風流おどりをあわせたものと思われる。		
県	無形民俗文化財	各荷神楽	みょうがかぐら		尾道市瀬戸田町	昭43.4.27			各荷神楽は、もとは荒神舞と称して、明治初年までは4年に一度の託宣を伴ひ荒神社の式年の神楽であった。ところが明治5年(1872)、太政官符により神樂が託宣行事に關与することを禁じられたため、神楽から託宣を除き、民間の人々によって十二神祇系神楽として今日まで伝えられてきたものである。演目のうち、「悪魔戯い」「三堂荒神宮籠」「剣舞」「王子」はよく古形を伝えており、なかでも「三堂荒神宮籠」は、赤白の紙を着せた人形に神酒を注ぎ、その色にじみ方で神意をうかがうもので託宣神事の一部を伝えるものと思われる。		
県	無形民俗文化財	小味の花おどり	こみのはなおどり		尾道市原田町	昭45.1.30			この踊りは、行基の開基と伝える摩訶衍寺(まかせんじ)の秘仏十一面觀音が、33年ごとに開帳される時奉納される踊りである。この花おどりは、花をつけた笠をかむった數十人の踊り子が、かん鼓、鉦(かね)、笛にあわせて踊るものであるが、かつて花笠につける花は、上組は牡丹、下組は桜、小味組は菊と、組によって異なつていたという。踊りは数多いが、そのなかで「糸屋踊」は太鼓20張を主体にした摩訶衍寺の法要に際して演ぜられるもの、「雨乞踊」は、寺の上方の竜王を祀つた台地で踊られるもので、雨乞のおどりとのおれおどりである。		
県	無形民俗文化財	神楽	かぐら		尾道市御調町	昭46.12.23			この神楽は、「千草舞」「悪魔払」「三恵比須」「折敷舞」などの舞によって構成されており、壘2枚の広さの中で舞う櫃中神楽の古型を多分に残している。その中で「折敷舞」というのは、神の献饌に用いる折敷を採物とした舞で、もとは神舞・剣舞・真庭舞(ごさまい)などと同じく、神楽の最初に舞われる儀式舞の一つであったが、明治初年にこの舞に趣向が加えられ、折敷のかげりに傘や刀身を持ち、それに多数の笠をのせて舞う舞となった。なお、「三恵比須」などの狂言舞は古風な舞いを伝承しているものである。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	無形民俗文化財	木ノ庄の鉦太鼓おどり	きのしょうのかねたいこおどり		尾道市木ノ庄町	昭54.3.26			この「おどり」は、大太鼓・大鉦(おおがね)・笛・カッパ等を備えつつ、木ノ庄市原の幣高八幡神社の秋祭に奉納するおどりである。本来は、豊作の予測される歳の夏に五穀豊饒を感謝して八幡神社に奉納する行事であったと思われるが、ち夏の虫送り行事ともなり、夏には早天候まの際の晴乞いおどりともなり、はては益こころに行われることから、地元に関係の深田城主杉原氏の恵堂おどりという意味も加えられた。		
県	無形民俗文化財	椋浦の法楽おどり	むくのうらのほうらくおどり		尾道市因島椋浦町	昭56.4.17			尾道市因島の椋浦町金蔵寺に勢揃いした「法楽おどり」の一行は、午後4時ごろ、一本の幡(ばん)を先頭として、町内の良(うしろ)神社に向かって行進する。この時刻は、最後に汐の引いた海岸でおどる時の汐加減のためである。 このおどりの起源は明らかでないが、地元の所伝によれば、中世ごろ因島を中心とした水軍が、出陣の時は椋浦で戦いの勝利と陸士の安全を祈り、帰陣の際は中庄で勝利を祝うとともに戦没者の追悼を行ったというが、その時の行事が「法楽おどり」の起源であるという。侍らしい軽装に太刀、早駆けの姿勢や跳ぶような動作、六字の名号に大幡などから、水軍に関係のあったことがうかがえる。		
県	無形民俗文化財	中庄神楽	なかのしょうかづら		尾道市因島中庄町	昭57.2.23			毎年4月15日と10月15日に中庄八幡神社に奉納される神楽である。本神楽団には「昭和3年5月上旬」に宮地左近春光の書写した「神楽台本」が保存されており、記述によれば安政7年(1860)のものとも推定される。 本神楽団はこの台本に記載された演目すべてを上演でき、荒神神楽の古型を保っている点で貴重である。 なお本神楽と同じ「十二神祇」を称するものに豊田郡瀬戸田町の生口島名荷の荒神神楽がある。		
国	登録有形文化財(建造物)	吉原家住宅表長屋門	よしはらけしゅうたくおもてながやもん	1棟	尾道市向島町	平9.7.15	木造平屋建、瓦葺、明治18年(1885)建設	建築面積114㎡	広大な屋敷構えを持つ農家の長屋門形式の表門である。明治時代の建築であるが、文政8年(1825)の家相図により、その時にあった門の規模・形式を継承したものと推定される。向島では類例が少ない長大な規模を持つ表門で、普請関係の記録も残る。		
国	登録有形文化財(建造物)	白滝山荘(旧ファーマ住宅)	しらたきさんそう(きゅうふあーなむじゅうたく)	1棟	尾道市因島重井町伊浜	平11.10.14	木造一部鉄筋コンクリート造3階建、瓦葺、昭和6年(1931)頃建設	建築面積105㎡	白滝山荘は、因島市の北部にある雲山白滝山(標高226.9m、市指定史跡・名勝)の登山口に位置するアメリカ人宣教師の居宅で、斜面に建ち、1階を鉄筋コンクリート造、2・3階を木造とする。急傾斜屋根にドーマー窓を付けたハーフティンバー・スタイルの洋館で、ヴォーリス建築事務所の特徴の一端をよく伝えている。		
国	登録有形文化財(建造物)	耕三寺山門	こうさんじさんもん	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	鉄造、間口4.5m		耕三寺境内の北端にあって、伽藍中心軸上に位置する。柱4本を立て、中央に両開、両端に片開の扉を吊り、両袖は瓦葺とする。柱、扉ともに鉄製で、白色を基調に随所に丹色を配し、扉にはさまざまな絵柄の装飾を施す。街路に面して境内のランドマークとなる建造物である。		関連施設: 耕三寺博物館(0845-27-0800)
国	登録有形文化財(建造物)	耕三寺中門	こうさんじちゅうもん	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造、瓦葺、間口3.6m		四間二戸の二重門で、入母屋造、本瓦葺、法隆寺の西院伽藍の中門を原型とするが、梁間は二間とし、各部比例も異なる。組物等の装飾はおおむね原型を踏襲しているが、銚金具、彩色などを多用し、壮麗な外観としている。		関連施設: 耕三寺博物館(0845-27-0800)
国	登録有形文化財(建造物)	耕三寺羅漢堂	こうさんじらかんどう	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19			中門の両側に挟く回廊状の建築で、内部に羅漢像を設置する。左右とも桁行17間、梁間1間の規模で、本瓦葺、切妻造とする。外壁面を連平窓、内側を扶扉。小屋は虹梁、椽首組に化粧屋根裏とする。中心伽藍のみでは最も初期の建築である。		関連施設: 耕三寺博物館(0845-27-0800)
国	登録有形文化財(建造物)	耕三寺鐘樓	こうさんじしやうろう	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19			羅漢堂東側背面に建ち、鼓楼と同じ規模形式を持つ。桁行3間、梁間2間、入母屋造、本瓦葺で、白漆喰の袴腰を備える。新薬師寺鐘樓を模したもので、上部に高欄を持たない縁を張り出す。上層内部は中央部を吹き抜けとし、両側に床を張る。		関連施設: 耕三寺博物館(0845-27-0800)

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	登録有形文化財(建造物)	耕三寺鼓樓	こうさんじこうろう	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造平屋建, 瓦葺	建築面積32㎡	羅漢堂西側背面に建ち、鐘樓と対をなす。鐘樓と同規模同形式で、細部裝飾に至るまでほぼ完全に同一である。1階は4半数の土間とし、上層に高欄を設けない縁を出し、二手先の組物に二軒紫垂木、入母屋造、本瓦葺とする。		関連施設: 耕三寺博物館 (0845-27-0800)
国	登録有形文化財(建造物)	耕三寺仏宝殿	こうさんじぶつぼうどう	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造平屋建, 瓦葺	建築面積63㎡	一連の加藍からはやや東寄りにつづ、桁行5間、梁間2間、平入、入母屋造、本瓦葺の宝殿。内部は板敷きで一室とする。耕三寺の建築の中では比較的簡素で、新築師寺本堂を模したとされるが、規模、各柱間に長押、連子窓を設ける外観など大きく異なる点が多い。		関連施設: 耕三寺博物館 (0845-27-0800)
国	登録有形文化財(建造物)	耕三寺法宝殿	こうさんじほうぼうどう	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造平屋建, 瓦葺	建築面積180㎡	加藍中央に建つ宝物館で、僧宝殿と対をなす。桁行4間、梁間3間の身舎四周に裳階を廻らす。屋根は入母屋造、本瓦の葺きとする。四天王寺金堂を模したといわれるが、法宝殿は妻入であり、屋根勾配、各部比例なども大きく異なる。		関連施設: 耕三寺博物館 (0845-27-0800)
国	登録有形文化財(建造物)	耕三寺僧宝殿	こうさんじそうぼうどう	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造平屋建, 瓦葺	建築面積180㎡	加藍中段東側に建ち、同型同規模の法宝殿と五重塔をはさんで対をなす。四天王寺金堂を参照しつつ大きく外観を変え、身舎は円柱に二手先、裳階は角柱に平三斗とし、内部は折上格天井の大空間とする。昭和前期における大規模木造寺院建築の好例である。		関連施設: 耕三寺博物館 (0845-27-0800)
国	登録有形文化財(建造物)	耕三寺至心殿	こうさんじしんしんでん	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造平屋建, 銅板葺	建築面積114㎡	加藍最上段西側に建ち、信楽殿と対をなす。法界寺阿弥陀堂を模したと伝えられ、5間四方の身舎に吹き出しの裳階を設け、屋根は宝形造、銅板葺。組物は平三斗で、裳階の正面中央部のみ一段高く屋根を設ける。内部は一室とし、各種用途に活用されている。		関連施設: 耕三寺博物館 (0845-27-0800)
国	登録有形文化財(建造物)	耕三寺信楽殿	こうさんじしんぎょうでん	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造平屋建, 銅板葺	建築面積104㎡	加藍最上段の東側に建つ。至心殿とは対をなし、同規模同形式とするが、平面などに若干の違いがある。身舎柱は円柱。裳階柱は角柱で、講堂として用いられる身舎内部は一室とし、天井は折上小組格天井。四周外壁は節戸を見せるが、内部には壁が設けられている。		関連施設: 耕三寺博物館 (0845-27-0800)
国	登録有形文化財(建造物)	耕三寺本堂	こうさんじほんどう	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造平屋建, 瓦葺	建築面積271㎡	中堂、左右翼廊、尾廊からなる堂宇。いづれも本瓦葺とし、軸部、壁面、建具に至るまで極彩色を施し、飾金具を用いる。平等院鳳凰堂を模しているが、細部においては異なる点も多く、内部外部とも壮麗さを増しており、耕三寺の中核建築として知られている。		関連施設: 耕三寺博物館 (0845-27-0800)
国	登録有形文化財(建造物)	耕三寺多宝塔	こうさんじたほうとう	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造多宝塔, 銅板葺	建築面積25㎡	本堂西方に建つ。石山寺多宝塔を模しており、下層は方3間の周囲に縁を廻らし、上層は円形平面で四手先組物で二軒紫垂木の軒を支え、屋根は上層下層とも銅板葺とする。比較的原件に忠実であり、組物等に彩色を施した外観は社屋である。		関連施設: 耕三寺博物館 (0845-27-0800)
国	登録有形文化財(建造物)	耕三寺八角円堂	こうさんじはっかくえんどう	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造平屋建, 瓦葺	建築面積71㎡	本堂を挟んで多宝塔と対置される。正八角形平面を持ち、屋根は宝形造、本瓦葺。法隆寺夢殿を模しているが、規模を縮小している。柱は八角柱で、組物は隅部出三斗、中欄は平三斗、内部は板敷で、中央は鏡天井、周囲を格天井とする。		関連施設: 耕三寺博物館 (0845-27-0800)

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	登録有形文化財(建造物)	耕三寺銀龍閣	こうさんじぎんりゅうかく	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造平屋建、銅板葺	建築面積40㎡	境内南東方の庭園池奥に張り出して建つ、八畳大の板間の三方に縁を廻らし、東側に床と小室を設ける。屋根は宝形造の銅板葺。板間は鏡天井として龍の絵を描き、軸部はすべて顔色とする。板間の障子に花頭窓を設ける点も特徴的で、特異な意匠の建築である。		関連施設: 耕三寺博物館 (0845-27-0800)
国	登録有形文化財(建造物)	耕三寺潮聲閣	こうさんじちうせいかく	1棟	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平15.9.19	木造及び鉄筋コンクリート造平屋一部2階建、瓦葺、車寄付	建築面積389㎡	境内東北隅に建つ住宅建築。ポーチを持つRC2階建の洋館と、唐破風の玄関を持つ木造平屋建の和館からなり、洋館、和館玄関、老人室など各所に意匠を凝らす。洋館と和館を並立させる昭和初期の大規模住宅建築の特徴をよく伝える。		関連施設: 耕三寺博物館 (0845-27-0800)
国	登録有形文化財(建造物)	久山田貯水池堰堤	ひさやまたちよすいちえんてい	1基	尾道市久山田町	平16.11.29	粗石モルタル積表面張石造 堤長75.0m 堤高22m 有効貯水量754,000?		大正14年尾道市水道開設に伴い建造。市南西部を流れる門田川に建設された。中央に越流部を設けた堤長75m、堤高22mの石張コンクリート造堰堤で、堤体右岸寄り前半円の取水塔を張り出す。平面形状は副堰堤との同心の内弧とし、重力式とアーチ式を複合した構造形式が特徴。		
国	登録有形文化財(建造物)	長江浄水場着水井	ながえじょうすいじょうちやくすいせい	1井	尾道市長江	平16.11.29	鉄筋コンクリート造 長方形 面積5.0㎡ 内法長さ4.2m 幅1.2m 深さ2.4m		大正14年尾道市水道開設に伴い建造。横ヶ峠の頂を約12m掘り下げて築かれた尾道市創設水道の浄水池施設の一つ。水源地より自然落下により導水された原水を受ける施設で、鉄筋コンクリート造隔壁で内部を区切り、天端には花崗岩を配す。		
国	登録有形文化財(建造物)	長江浄水場緩速ろ過池	ながえじょうすいじょうかんとくろかち	4池	尾道市長江	平16.11.29	鉄筋コンクリート造 扇形454㎡ 深さ2.4m		大正14年尾道市水道開設に伴い建造。着水井から導かれた水をろ過処理するための施設。外半径48m、内半径24m、中心角120°で、内部を隔壁により4等分とした扇形平面の鉄筋コンクリート造構造物で天端には花崗岩を配す。狭小地を巧みに利用した類例の少ない平面形状が特徴。		
国	登録有形文化財(建造物)	長江浄水場配水池	ながえじょうすいじょうはいすいち	1池	尾道市長江	平16.11.29	鉄筋コンクリート造 鉄筋コンクリート造り上屋計量室 内径27.0m 深さ3.0m		大正14年尾道市水道開設に伴い建造。ろ過池と同心の半径14mの円形鉄筋コンクリート構造物で内部は中央隔壁で2分される。池中心部の円井で減菌水が注入されたろ過水を、円形2条の導流壁に沿って蛇行させることで攪拌作用を高める。円井上方にはアールデコ風の平面12角形の上屋を設ける。		
国	登録有形文化財(建造物)	旧福井家住宅主屋	きゅうふくいけしゅうたく(おのみちしふんがくきねんしつ)しゅおく	1棟	尾道市東土堂町	平16.11.29	木造平屋建、瓦葺	建築面積210㎡	尾道水道に臨む斜面に南面して建ち、寄棟造の東棟が大正元年、入母屋造の西棟が昭和2年築で、ほぼ中央の玄関を挟んで巧みに連続する。木造平屋建、椽瓦葺で、檜を中心に楓や鉄刀木(たがやさん)などの銘木を多用した上質な造りになり、瀟洒な数寄屋風の意匠でまとめている。		
国	登録有形文化財(建造物)	旧福井家住宅茶室	きゅうふくいけしゅうたく(おのみちしふんがくきねんしつ)ちやしつ	1棟	尾道市東土堂町	平16.11.29	木造平屋建、瓦葺	建築面積28㎡	昭和3年築。主屋西棟の北西部に連続しており、尾道の近代における茶室趣味の有様の一端を物語っている。規模は小さいが、木造平屋建、椽瓦葺で、4畳半茶室に廊下を挟んで控えの間が付属した形式になっている。主屋と同じ良材を持ち、洗練された丁寧な造りである。		
国	登録有形文化財(建造物)	旧福井家住宅蔵	きゅうふくいけしゅうたく(おのみちしふんがくきねんしつ)くら	1棟	尾道市東土堂町	平16.11.29	土蔵造2階建、瓦葺	建築面積25㎡	土蔵造2階建、南北棟の切妻造、妻入で、殿前が主屋西棟の北側に連続している。規模は桁行6m、梁間4m、屋根は椽瓦葺。外壁は漆喰塗で、1・2階境に乾置風の段をつけて水切り瓦を葺す。2階表面には小庇付の窓を設ける。主屋と一連の丁寧な造りになる。建築時期は主屋東棟とほぼ同時期の大正元年ごろと考えられる。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	登録有形文化財(建造物)	竹村家主屋	たけむらやしゅおく	1棟	尾道市久保	平16.11.29	木造2階建、瓦葺	建築面積481㎡	大正9年築。木造2階建、檜瓦葺で、北が道路、南が海に面している。全体は南北棟の北側と東西棟の南側が直交したT字型の形態で、竹材の細工や造作を多用した繊細な書院造である。北正面は棟違いの八様造風に抜うなど、外観は重厚かつ豪放で、地域景観の核になっている。		
国	登録有形文化財(建造物)	竹村家門及び塀	たけむらやもんおよびへい	1棟	尾道市久保	平16.11.29	木造、瓦葺、間口2.4m、塀延長20.0m		大正9年築。門は北辺西寄りに設けられた切妻造、銅板葺の棟門で、簡素な袖帯がつく。これに続く塀は、真壁造、檜瓦葺で、腰から上を黒漆喰塗りし、簾を入れた縦長の小窓を開け、重厚さと繊細さを併せ持つ。敷地の北辺と西辺を区画しつつ、街路景観を整えている。		
国	登録有形文化財(建造物)	長江浄水場ベンチューリ上屋	ながえじょうすいじょうベンチューリうわや	1棟	尾道市長江三丁目	平23.1.26	鉄筋コンクリート造平屋建、切妻造、建築面積5.9㎡		尾道市街の丘陵上にある浄水場南端に建つ。桁行2.6m、梁間2.6m、鉄筋コンクリート造、切妻造妻入で、正面出入口に切妻屋根の庇を付ける。軒下や妻面に縁型風の持送りや付けるなど、木造洋風建築を鉄筋コンクリート造で表現した上屋である。大正14年建設。		
国	登録有形文化財(建造物)	旧高橋家住宅主屋	きゅうたかはしけしゅうたくおもや	1棟	尾道市日比崎町	平23.7.25	木造2階建、瓦葺、建築面積230㎡		粟原川沿いの敷地中央に東面して建つ。桁行18m梁間13m、木造二階建、入母屋造檜瓦葺で、南東隅に応接間と玄関を張り出す。周囲を開放的に造り、屋根は入母屋破風を複合させ、応接間に洋風意匠を採用するなど、変化のある外観になる大型住宅である。		
国	登録有形文化財(建造物)	旧和泉家別邸	きゅういずみけべつてい	1棟	尾道市三軒家町	H25.12.24			千光寺山南西斜面の石垣上に立つ小住宅。木造2階建てで下見板葺の和館の南にモルタル塗の洋館を接続する。家形の敷地を巧みに利用しており、2階8畳縁敷や階段の造作も丁寧である。入母屋屋根に切妻破風や小庇、露台をつけ、変化に富んだ屋根構成を見せる。		
国	登録有形文化財(建造物)	みはらし亭	みはらしてい	1棟	尾道市東土堂町	H25.12.24			千光寺山東方斜面の参道に面する木造2階建。高い石垣の上に建ち、東面に縁を設けて尾道水道の眺望を得る。2階北端に12畳の主座敷を設け、南端の室は敷地形状により上下階とも変形平面を呈する。屋根は入母屋造檜瓦葺で、軒は丸太の化粧重木を隔隔に配る。		
国	登録有形文化財(建造物)	西山本館	にしやまほんかん	1棟	尾道市十四日元町	H27.3.26			旧出雲街道に面して建つ現役の旅館。木造二階建てと三階建ての棟が複雑に組み合わされ、全ての客室が底に面するよう工夫されている。丁寧な仕上げの客室屋(すきや)風の和室のほか、かつて外国人船員の宿泊にも対応して洋室三室を持つなど、港町の風情を醸す木造旅館建築。		
国	登録有形文化財(建造物)	多門亭	たもんてい	1棟	尾道市東土堂町	平31.3.29	木造2階建、瓦葺	建築面積125㎡	千光寺山南腹にある旧料亭。切妻造りの総二階建てで上下階に各玄関を設け、一階に中廊下を通して小座敷を並べ、二階に大座敷を配する。山腹に広がる市街地の歴史的景観の構成要素である。		大正9年頃/昭和40年頃改修

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	登録有形文化財(建造物)	向酒店舗兼主屋	むかいさけてんぼけんおもや	1棟	尾道市久保一丁目	令2.4.3	木造二階建、瓦葺	建築面積77㎡	向酒店舗兼主屋は尾道市街地に建つ店舗兼用住宅。大屋根は棧瓦葺だが、一階正面の庇(ひさし)を本瓦葺として重厚に見せる。二階の建ちは高く、近代の町家の特徴を持っている。		大正14年頃
国	登録有形文化財(建造物)	旧尾道市役所百島支所庁舎	きゅうおのみちしやくしよもしもしょうしや	1棟	尾道市百島町	令4.10.31	木造2階建、鉄板葺	建築面積251㎡	百島北東部にある役場庁舎。木造二階建、半切妻造で、縦長窓を基調に洋風とし、正面頂部ガラハ二階の四連窓が特徴的。二階はキングポストトラスで大広間とし、一階カウンター付事務室が住時を伝える。現在、ゲストハウスとイベントスペースとして活用。		昭和29年/令和元年改修
国	登録有形文化財(建造物)	旧村井醫院診療棟	きゅうむらいいいんしんりょうとう	1棟	尾道市御調町	令5.8.7	木造平屋建、棧瓦葺	建築面積89㎡	山陽道と出雲街道が交わる御調(みつぎ)の町にある洋風の医院建築。診療棟は、寄棟造り棧瓦葺きで、外壁は下見板張と定規柱風にモルタル塗り仕上げとする。ベデメント付きの上げ下げ窓と石柱の門が街道沿いの歴史的景観を形成する。		大正7年/昭和中期・平成24年改修
国	登録有形文化財(建造物)	旧村井醫院門柱	きゅうむらいいいんもんちゅう	1基	尾道市御調町	令5.8.7	石造、石槽付	間口1.9m			大正7年頃/昭和中期改修
国	登録有形文化財(建造物)	旧宮地醤油店離れ(林美美子旧居)	きゅうみやぢしやうゆてんはなれ(はやしふみこきゅうきよ)	1棟	尾道市土堂一丁目	令5.8.7	木造二階建、鉄板葺	建築面積12㎡	尾道駅に程近い商店街にある醤油店の付属建物。短冊形敷地背面側に建ち、離れや醤油蔵、一時貸家した。当地では算風を避けて二階東面は壁として美観に窓を設けるが、その特徴を持つ。大正6年頃には小説家林美美子が入居しており、現在、資料館として活用。		明治中期/昭和51年頃改修
国	登録有形文化財(建造物)	旧小野産婦人科医院	きゅうおのさんふじんかいいいん	1棟	尾道市十四日元町	令7.3.13	木造三階建、鉄板葺	建築面積100㎡	尾道の中心部に位置する旧産婦人科医院。隅切した角地に建つ木造三階建てで、庇や付柱など直線的構成で角地を強調した外観が印象的な医院建築。現在は店舗等として活用。		
国	登録有形文化財(建造物)	旧小林家住宅主屋	きゅうこばやしけじゅうたくおもや	1棟	尾道市長江	令7.3.13	木造二階建、瓦葺	建築面積172㎡	長江通り東側の石垣上に建ち、洋画家小林和作(わさく)が晩年まで居住した主屋。二階はアトリエとして用い、西面に掃出窓を開けた眺望優れた主屋。現在は小林和作の遺品展示や交流施設として活用。		
国	登録有形文化財(建造物)	インネ事務機社屋(旧尾道警察署庁舎)	いしねむきしやおく(きゅうおのみちけいさつしやうしや)	1棟	尾道市古浜町	令7.8.6	木造二階建、瓦葺	建築面積 248 ㎡	かつて、市街地中央部に位置した、尾道警察署庁舎を移築し、事務所として転用した建物。木造2階建て寄棟造り棧瓦葺きで外壁に縦長の上げ下げ窓を配す。洋風の外観が警察署庁舎の面影を留め、地域の歴史を伝える貴重な遺構。		
国	登録有形文化財(建造物)	後藤館泉所店舗兼工場	ごとうせんしんしよぼけんこうじょう	1棟	尾道市向島町	令7.8.6	木造二階一部平屋建、瓦葺一部鉄板葺	建築面積321 ㎡	向島にあるラムネなどの飲料製造販売所。敷地西側は工場及び倉庫を配し、東側は通りに面して店舗を増築し、全体に複雑な屋根構成とする。工場に製造機器を残すなど、町の賑わいを伝える店舗兼工場。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	登録有形文化財(建造物)	村井家住宅主屋 (旧市村郵便局)	むらいけじゅうたくおもや (きゅういちむらゆうびんきょく)	1棟	尾道市御調町市	令8.2.10	木造二階建、セメント瓦葺	建築面積213㎡	旧出雲往来に東面して建つ旧郵便局を併設する主屋と土蔵。当該地域は市村といわれた旧村で、戦後まで家畜市の立つ宿場町があり、建物はその宿場町の商店が立ちならぶ町並みの一角に位置している。江戸時代には、家主が大庄屋、御山奉行の役を務め、その役割にふさわしい建物の規模、造りとなっている。主屋は2階建切妻造、柱瓦葺の町家の南側にアーチやメダランで飾った石造風外観の郵便局を付加する。全体の平面は奥行きが深く、座敷は良材を用いた端正なつくり。洋風の郵便局を備えた外観が街道の賑わいを伝える。 土蔵は主屋の土間北側に接続して建つ。2階建切妻造で置屋根形式の桧瓦葺で正面に下屋を付す。小屋組は曲がり梁を用いた和小屋。主屋と一体となって街道沿いの景観を形成する。		
国	登録有形文化財(建造物)	村井家住宅土蔵	むらいけじゅうたくどそう	1棟	尾道市御調町市	令8.2.10	土蔵造二階建、瓦葺	建築面積64㎡			
国	登録有形文化財(記念物)	瓢箪島	ひょうたんじま		尾道市瀬戸田町 愛媛県今治市上浦町	平25.3.27		8,958平方メートル(全島 17,576平方メートル)	瓢箪島は瀬戸内海に浮かぶ瓢箪の形をした無人島で、広島県尾道市の生口島(くちじま)と愛媛県今治市の犬三島(いぬみしま)との中間に位置する。島の周囲は約700メートルあり、県境が横切る瓢箪形のくびれ部を挟んで、広島県側の最高所は標高23.4メートル、愛媛県側の最高所は標高35.2メートルである。 昔、生口島の神と犬三島の神が島取りを目的として綱引きを行ったため、くびれてしまった島の形を双方の島民が心配して和解することになったという民話が伝えられている。島の周辺海域は良好な漁場であることから、その漁業権をめぐる紛争に端を発して生まれた民話であろうと考えられており、多発した境界争いの証拠として、島内には明治時代の境界石も残されている。また、瓢箪形の小島を誇らしく歌い上げた舟歌も伝えられており、島の風致景観は漁師たちの間でもてはやされて来たことが知られる。 瓢箪島は、昭和39年に放映が開始されたNHKのテレビ人形劇『ひょっこり、ひょうたん島』のモデルとなったとされる島の一つとしても著名である。再現することが容易でない名勝地として意義深い。		